



JACET通信

一般社団法人 大学英語教育学会

December 2014

The Japan Association of College English Teachers

No.192

目次

巻頭言（神保尚武）	1頁	第54回（2015年度）国際大会	13頁
第53回国際大会		2014年度JACET賞	15頁
「大会を振り返って」（松岡博信）	3頁	本部だより	16頁
大会報告（馬場千秋）	4頁	特別寄稿（千葉克裕）	26頁
担当支部と会場校から（岩井千秋）	4頁	特別委員会報告	28頁
講演・シンポジウム	5頁	支部だより	32頁

[巻頭言]

2014年度前半を経過して

一般社団法人大学英語教育学会会長 神保 尚武
早稲田大学

2014年度の前半を経過し、より自由闊達な研究・啓蒙活動が展開されております。前半の主な活動を振り返り、後半の展望をしたいと思います。

第1号事業

(1) 第53回（2014年度）国際大会の開催

広島市立大学で「平和と友好をめざす英語コミュニケーション能力の育成」(Fostering English Communicative Competence for Peace and Friendship)をテーマに8月28日(木)から8月30日(土)の期間に開催されました。参加者は800名以上となり、盛会のまま無事に終了いたしました。

基調講演、全体シンポジウム、特別シンポジウム、海外提携学会の講演、国内招待講演の他、多くの研究発表、実践報告、ポスター発表がありま

した。全体シンポジウムでは、「Teaching English for Peace: Fostering Global Citizenship」をめぐる、大会テーマを追求しました。特別シンポジウムでは、「大学英語教育における『教育の質保証』に向けて—「外部試験」導入の議論を通じて—」というテーマを取り上げました。特別企画として「グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み」というポスターセッションを昨年度に引き続き実施いたしました。

(2) サマーセミナー

第41回（2014年度）サマーセミナーは、8月18日(月)から21日(木)の期間に草津スカイランドホテル(群馬県草津町)で開催されました。テーマは「CLIL and Content-based Language Teaching: New global perspectives on bilingualism and immersion (CLILと内容基盤型

言語教育：グローバルな視点からのバイリンガル教育とイメージン”で、主任講師はRoy Lyster氏(McGill University, Canada)、国内講師として、Makoto Ikeda氏(上智大学)とCarol Inugai-Dixon氏(International Baccalaureate Organization)をお招きしました。参加者による発表もあり、互いに研鑽し、最終的に60名近くとなるセミナーとなりました。

(3) 英語教育セミナーの開催

平成26(2014)年度第2回JACET英語教育セミナーを12月6日(土)に愛知大学(名古屋校舎)で開催いたします。テーマは『小・中・高・大連携の現状と課題』です。教材や指導を具体的に理解する機会として、賛助会員の協力を得て、講演や教材の展示などを行い、英語教育の改善と発展に寄与します。講演は、岡田伸夫氏(関西外国語大学)の予定です。

(4) 支部大会・研究会の開催

それぞれの支部は、大会や研究会を随時開催しております。

第2号事業

(1) 『紀要』の刊行

『紀要』第59号を2015年1月上旬に刊行します。

(2) 『Selected Papers』の刊行

第52回(2013年度)国際大会から、発表した発表者の学術研究を奨励するために、論文発表の機会をSelected Papersとして与えることになりました。その記念すべき第1号を平成26(2014)年10月にウェブサイトに掲載しました。

(3) 『JACET通信』の刊行

『JACET通信』第191号(日本語、ウェブ版)を2014年7月1日に刊行しました。第192号(日本語、印刷版とウェブ版)を2014年12月1日に、第193号(英語、ウェブ版)を2015年3月1日に刊行する予定です。

(4) 『支部紀要』・『ニューズレター』の刊行

それぞれの支部が『紀要』と『ニューズレター』を随時刊行しております。

第3号事業

大学英語教育学会賞の表彰

英語教育における研究または実践上の顕著な業績を通してわが国における大学英語教育の改善と進歩・発展に寄与した本学会員である個人または

団体に対して、大学英語教育学会賞を授賞しています。本年は、同賞学術出版部門と同賞実践部門のそれぞれ1件ずつに授賞し、国際大会においてその表彰式が行われました。なお、大会時の学生会員発表者の中からその最優秀な学生発表を行った学生会員に対して、同賞新人発表部門を授与いたしました。

第4号事業

協力事業—関係学術団体との交流

(1) 海外との学術団体との交流

以下の提携学会の年次大会に本学会の代表を派遣し招待講演をしたり、シンポジウムに参加したりします。また各学会からの代表をJACET第53回(2014年度)国際大会に招待しました。

REL C (Regional Language Centre), IATEFL (International Association of Teachers of English), KATE (The Korea Association of Teachers of English), MELTA (Malaysian English Language Teaching Association), PKETA (Pan-Korea English Teachers' Association), ALAK (The Applied Linguistics Association of Korea), ETA-ROC (English Teachers' Association of Republic of China), CELEA (Chinese English Language Education Association), Thailand TESOL, AILA (Association Internationale de Linguistique Applique)

(2) 国内の学術団体との交流

本年度の国際大会では、賛助団体との特別シンポジウムを企画しました。その団体は日本英語検定協会、国際ビジネスコミュニケーション協会、国際教育交換協議会でした。今後もこのような連携を模索していきます。

第5号事業

調査研究事業

(1) 専門分野別の研究会

現在42の研究会が活発な活動をしており、その支援を強化していきます。

(2) 特別委員会

現在下記の3委員会が活動しております。

- ・第4次ICT研究特別委員会
- ・グローバル人材育成特別委員会
- ・基本語彙改訂特別委員会

上記の様々な活動に加え、内部的には研究促進委員会が研究全体の相互調整を行っております。外部的には、学会の社会的責任を果たすために、新たな外国語教育への提言を文部科学省に対して提出し、外部資金の調達を基本とした受託研究や共同研究を推進していきます。特に、グローバル

化時代に対応して、国内の言語教育諸団体との連携や海外提携学会との本格的な共同研究を進めております。

会員のみなさまの学会活動へのますますの積極的参加を期待しております。

[第53回国際大会]

大会を振り返って： 平和と友好をめざす英語コミュニケーション能力

大会委員長 松岡 博信
安田女子大学

第53回国際大会は、平和都市広島市での開催に相応しく、上記タイトルのテーマのもとに8月28日(木)から8月30日(土)の3日間、同市安佐南区に位置する広島市立大学で開催された。安佐南区と言えば、直前の8月20日の豪雨による土砂災害で、連日全国に名前が報道された地域である。実際のところ、会場となった広島市立大学でも教員の方が亡くなられ、一時は国際大会の開催も危惧された。開会式における私の大会委員長としての歓迎挨拶が、この痛ましい自然災害に言及することになるなど8月当初までは夢にも思わなかった。亡くなられた74名の方々の冥福を心よりお祈り申し上げるとともに、未だに災害の爪痕に苦しんでおられる方々の一日も早い平常生活への復帰を祈念したい。

そのような状況であったにもかかわらず、会場校となった広島市立大学の関係者の方々は本大会の運営に大変協力的で、そのおかげで大きな問題もなく大会は走り出し、無事に完走することができた。この規模の大きい国際大会の開催をご支援くださったことに対し、岩井千秋国際大会組織委員会支部委員長を初めとする広島市立大学の教職員、学生の皆様に対して心より謝意を表したい。

さて、大会の概要であるが、国内招待講演、多くの研究発表、実践報告、ポスター発表が行われた。基調講演は、Kip A. Cates教授(鳥取大学)とCraig Smith教授(京都外国語大学)にお願いした。大会シンポジウムは、このお二人の先生方



と浅川和也教授(東海学園大学)により“Teaching English for Peace: Fostering Global Citizenship”というテーマで開かれた。海外提携学会代表者の講演も6件が行われ、グローバル人材育成のための特別企画のポスター発表は、第1分野が「到達目標とその評価」、第2分野が「留学生派遣プログラム」と昨年度より拡大して実施された。さらに、特別シンポジウムとして「大学英語教育における教育の質保証に向けて—外部試験導入の議論を通じて」のテーマのもと、西川美香子氏(日本英語検定協会)、安藤益代氏(国際ビジネスコミュニケーション協会)、根本斉氏(国際交換協議会(CIEE)日本代表部)の3名がシンポジストとして登壇し、尾関直子教授(明治大学)の司会のもとに活発な議論が繰り広げられた。また、中国・四国支部企画として、「大学英語教師の資質を高める養成・研修のありかた」と題したシンポジウムが開かれた。さらに、エキシビションとして島根

県立大学石見神楽舞濱社中による神楽の実演もあり、懇親会では広島風お好み焼きも振る舞われた。

最後に、820余名の参加者を集めた本大会の成功は、昨年度当初から入念な準備をしてくださった国際大会組織委員会本部および事務局の方々、優れた団結力で大会を支えてくださった国際大会組織委員会支部委員である中国・四国支部役員の方々の大変なご尽力の賜物であったことを報告し、大会委員長として、皆様に心底より感謝を申し上げます。

大会報告

国際大会組織委員会本部委員長
馬場千秋
(帝京科学大学)

第53回国際大会は、2014年8月28日(木)、29日(金)、30日(土)の3日間、広島県広島市の広島市立大学にて、「平和と友好をめざす英語コミュニケーション能力の育成」というテーマで開催されました。発表件数は合計195件でした。参加者は約800名と盛会となり、幕を閉じました。大会開催1週間前には広島市立大学のある広島市安佐南区で土砂災害があったため、大会が開催できるのか、という一抹の不安を抱えましたが、大学周辺は全く被害がなく、予定通り開催することができました。

基調講演と全体シンポジウムでは、世界平和と友好のための英語コミュニケーション能力養成に向けて、私たち英語教員が何をすべきか、示唆を得ることができました。

昨年に引き続き、特別企画「グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み」第2弾として、ポスターセッションを行いました。第1分野「到達目標とその評価」に16件、第2分野「留学生派遣プログラム」に30件の参加がありました。グローバル人材育成に関する企画は来年度も実施する予定です。

本大会では、文部科学省、広島市立大学、広島県教育委員会、広島市教育委員会、広島観光コンベンションビューロー、の後援をいただきました。ありがとうございました。

最後になりましたが、本大会開催に際し、素晴らしい施設をご提供いただきました広島市立大

学、準備段階からご尽力いただきました大会委員長の松岡博信先生、国際大会組織委員会支部委員長の岩井千秋先生、ならびに中国・四国支部の委員の先生方、本部委員の先生方、事務局の皆様により御礼申し上げます。

担当支部と会場校から

国際大会組織委員会支部委員長
岩井千秋
(広島市立大学)

第53回国際大会は8月28日～30日の日程で、広島市立大学で開催されました。大会1週間前に広島市を襲った土砂災害の影響で、開催そのものが危ぶまれました。しかし、大学周辺や交通機関に支障はなく、予定どおり開催できたことに関係者一同安堵しました。開会式冒頭では犠牲者を追悼し、出席者全員で黙祷を捧げました。蓋を開けてみると参加者数は800名を超え、盛会となりました。

今大会は国際平和文化都市を標榜する広島市での開催にちなみ、大会テーマに「平和と友好」が盛り込まれました。これに沿って、Kip A. Cates先生(鳥取大学)とCraig Smith先生(京都外国語大学)に基調講演をいただき、友好関係にある海外の学会からも多くの先生方にご参加いただきました。シンポジウム、ワークショップ、研究発表も数多く、多くの皆様に大会を盛り上げていただきました。

開催校決定からおよそ1年、どうすれば地方のよさを演出できるかを中国・四国支部役員の先生方と一緒に考える1年でした。教育をミッションとする本学会で、アトラクションで石見神楽(島根県立大生)を、懇親会でアカペラ(広島市大生)の学生パフォーマンスを採り入れたのはそのひとつの答えでした。それにしてもこの学会の開催にあたって多くの皆様にお世話になりました。会長の神保先生はじめ、本部役員と事務局の皆様、広島観光コンベンションビューローをはじめとする市や県の関係者、支部役員の先生方、そして学生の皆さん、すべてにお礼申し上げます。最後にこの素晴らしい機会を広島市立大学に与えていただいた学会関係者にも厚くお礼申し上げます。

講演・シンポジウム

*要旨は原則として、大会要綱に記載されたアブストラクトを転載しています。

【基調講演 1】

Building Bridges of Peace and Friendship: The Role of College English Teachers

Kip A. Cates (Tottori U.)

Moderator: Jimbo, Hisatake (Waseda U.)

The challenge of language educators to teach for a world of peace has been articulated by UNESCO (“since wars begin in the minds of men, it is in the minds of men that the defenses of peace must be constructed”) and by educators such as Maria Montessori (“establishing lasting peace is the work of education; all politics can do is keep us out of war”).

Teaching for peace and friendship is an urgent task in our modern world. Yet this has always been a prominent language teaching objective. Wilga Rivers (1968: 261), for example, mentions a 1933 report which proclaims the value of studying foreign languages as “breaking down barriers of provincialism while building up a spirit of international understanding and friendliness, leading toward world peace.”

If language educators are to help overcome the stereotypes, prejudice, war and violence that haunt our world, we need to rethink our approaches to curriculum design, teaching methods, classroom materials and teacher training. The fields of *global education*, *peace education* and *education for international understanding* can help us to build peaceful classrooms and schools while promoting tolerance, friendship and mutual understanding in Asia and the wider world.

What Japan – and every country – needs is young people with language skills, cross-cultural

awareness and international experience who can join with others in our global village to work for a peaceful future. College English teachers have a key role to play in this important task.

The year 2014 marks the 100th anniversary of the outbreak of World War I, a massive tragedy that devastated Europe, traumatized a generation and led to the deaths of 16 million people. This anniversary presents a perfect chance for us at JACET in Hiroshima to share ideas and renew our commitment to building bridges of peace and friendship through English.

【基調講演 2】

Japanese University Students and Global Peace-Building Conferences: The Development of English Language Skills

Craig Smith (Kyoto U. of Foreign Studies)

Moderator: Yamauchi, Hisako
(U. of Nagasaki, Siebold)

The Ministry of Education, and many universities, have introduced schemes which are intended to prepare Japanese university students to play creative roles in the numerous and diverse global communities that have come together to make the world a just place for more people. The relentless decline in the number of Japanese university students going abroad for academic study purposes has so far resisted innovative and generous efforts to reverse this worrying trend. International comparisons of English-language skills seldom bring educators here the good news they are hoping to see. However, at the same time, there is abundant evidence that Japanese students compare very favourably with their counterparts in other nations in measures of achievement in fundamental literacy and numeracy skills, advanced knowledge of science, and creative problem-solving capabilities. Perhaps most importantly, the youth sector of the population plays a considerable, often unheralded, role in

making Japan one of most peaceful and stable nations on earth. How can we, as college English teachers, take advantage of the potential of these strengths to deal with the challenges in helping our students find ways they can usefully contribute to the global community? Participation in international student conferences on our campuses may foster English communicative competence for peace and friendship. Co-curricular peace-building conferences held on our campuses can be transformative educational experiences because of the clarity and coherence of the sense of purpose that intense analytical engagement in the discussion and debate of issues, which are relevant to the well-being of the world's people, brings to English language study. Links can be forged between language and communication studies and a host of other courses in international relations, regional studies, international business management, agriculture, health care, law and engineering. Friendships

formed among conference colleagues, destined to last a lifetime, will serve the interests of peace.

【特別招待講演】

A New General Service List: Core Vocabulary Words for EFL Success

Charles Browne (Meiji Gakuin U.)

Moderator: Umesaki, Atsuko (Kansei Gakuin U.)

The New General Service List (NGSL) is a list of core vocabulary words for EFL learners and is a major update of West's (1953) GSL. Based on a carefully selected 273 million word sample from the Cambridge English corpus, the 2800+ words of the NGSL offer an amazing 92% coverage of most texts of general English. This presentation will give a brief background on the list and project before moving on introducing the new 1.01 version of the NGSL as well as the growing number of free online resources that are available to help you teach, learn, analyse or

広 告

create teaching materials based on the NGSL.

【国内招待講演1】

初対面会話データの分析から見た 日本語話者の英語：日本語母語会話と 異文化間英語会話の比較から

津田早苗（東海学園大・名誉教授）

司会：大森裕實（愛知県立大）

本講演では私個人の研究の足跡をたどるというより1994年創設、本年で20周年を迎える待遇表現研究会（初代代表 堀素子氏）での研究を中心にお話ししたい。私の40余年の研究・教育生活は研究会の仲間との共同研究を抜きにしては語れないからである。英語とその関連分野を大学で教えることに精一杯であった最初の10年、研究対象として興味を持ちながらも学生の教育に還元できる分野を暗中模索した次の10年を経て、40代半ばになり社会言語学・談話分析・異文化コミュニケーションに出会った。やっと自分の目指すものに焦点をあて、自分なりの研究に力を注ぎ始めた頃、堀先生からお誘いをうけ、1996年から待遇表現研究会に参加、今日に至っている。

初期の研究会の成果としては2006年に堀代表の下での『ポライトネスと英語教育』がある。JACET賞（学術賞）をいただくという名誉に浴し、これが研究会としての次のステップへの大きなエネルギーとなった。この研究以降、研究会は一貫して収録した会話データの分析という会話分析的な手法を用いて英語と日本語の会話データを語用面から分析し、その結果に基づき日本における英語教育について様々な提案を行ってきた。本講演では2012年から2014年の科学研究助成金による研究「国際語としての英語の語用指標解明と英語教育への応用—英語会話ができる日本人の育成」（代表 津田早苗）の目的・成果とその意義についてお話しする。

初期の異文化間会話データの分析において、英語検定試験で高得点を取る日本語話者が必ずしも語用的な側面について高い認識があるわけではないという結果を得て以来、研究会では特に会話の語用面を重視し、集めた会話データは80余になる。最近3年間の共同研究では、自己開示、応答要求表現と応答の連鎖、他者修復、あいづち、ター

ンと発話量、話題の展開などの会話のスタイルの文化差が分析対象となった。英語母語話者の会話、日本語母語話者の会話、両者の異文化間会話を対象としたこれらの側面に関する6人の研究を網羅してお話しすることは容易ではない。日本語話者が母語で必要とされる配慮をすると、かえって英語会話におけるコミュニケーションがうまくいかなくなる事例などを含め、研究の全体像を視野に入れて最近の3年間の研究成果を紹介したい。

【国内招待講演2】

国際英語論と大学英語教育

吉川 寛（中京大）

司会：大石晴美（岐阜聖徳学園大）

近年の日本での英語教育は、1960年代を境としてそれまでの英語教育と大きな変化が見られた。いわゆる「国際化」に伴い、「英語をコミュニケーションの手段として実践的に使用する」という目的に少しずつスライドし始め、教授法も「聴解、会話」の重視へと移行した。しかし、戦後、日本におけるアメリカの政治・経済的な影響が増加したことや、世界の軍事、経済におけるアメリカのヘゲモニーを背景として、学習モデルも「イギリス英語」から「アメリカ英語」へとシフトされたが、母語話者英語をモデルとする英語教育観は変わらなかった。しかしながら、post-colonialismの台頭や、globalizationによる世界における英語環境の変化を背景に、日本でも1990年代から新たな英語教育の展開が求められることとなった。「全ての英語変種は等価である」という国際英語の考え方へと少しずつではあるが移行し始めた。

多種多様な英語変種をどの様に認識し、どの様に定義するかについては、様々な考え方がある。KachruのWE (World Englishes) 論、SmithのEIL (English as an International Language) 論、JenkinsのELF (English as a Lingua Franca) 論等が提唱されている。これらの考え方を「国際英語論」という範疇で捉えると、共通認識として、①英語は国際語として使用されている、②言語は使用者の文化や価値観に応じて変容するものであり英語もその例外ではない、③国際英語とは原則として等価な英語変種の集まりである、の3点が

挙げられる。

このような共通認識を土台として国際英語論による英語教育を定義すると「国際英語論を取り入れた英語教育とは、多様な英語変種がそれぞれの使用者の文化・価値観を内包していることを受容し、個々の英語変種を等価な存在として捉え、そのような認識のもとに個々の英語変種を国際コミュニケーションの手段として使用することをめざす英語教育である」ということになる。本発表では「国際英語論」の概念が日本の英語教育にもちうる有効性について論じるとともに、国際英語を英語教育に取り入れる具体的方法等についても言及する。

【提携学会招待講演1】

Participants' Perception on an English Policy Program in Korea: Insights from the TaLK (Teach and Learn in Korea) Program

Hee-Kyung Lee (Yonsei U.; KATE)

Moderator: Kawakami, Noriko
(Kagoshima Immaculate Heart U.)

This study examined the perceptions of participants in a government-initiated program, TaLK (Teach and Learn in Korea), that aimed to provide children in rural areas with English education opportunities with native-speaking instructors. TaLK program is a unique integration of the policy for a societal concern to lessen the English Divide and a national concern to globalize Korea. The main goals of TaLK were 1) to lessen the English divide that exists in Korea by increasing English language proficiency among students in the rural areas; 2) to offer opportunities for foreign college students to learn Korean language and culture, and 3) to offer Korean college students with opportunities to enhance their inter cultural competence by interacting with foreign college students. Based on the survey responses of 851 TaLK participants- 280 foreign college students (Talk Scholar, TS), 398 Korean college students (Korean Assistants, KA), and 173

English teachers (ET), the analysis focused on the participants' perceptions of how well the implemented program reached its proposed goals and whether there was a difference in the perceptions across the three groups. By highlighting the multidimensionality of policy outcomes, the study will provide multiple perspectives enabling a fuller understanding of how one program can affect participants in different ways.

【提携学会招待講演2】

Intercultural Communication in the Context of English as a Lingua Franca: Changes and Implications

Xinren Chen (Nanjing U.; CELEA)

Moderator: Kawagoe, Eiko (Kobe C.)

In keeping with the pace of economic and cultural globalization, the English language has also become an international language, and a lingua franca (LF) at that. English as an LF entails a change in our conception of using the language from cross-cultural communication to intercultural communication. Under the new circumstances, significant questions worth asking, based on incidental observation, may include: Who are non-native English learners to communicate with in English? Where will the communication take place? How will they communicate? How will their mentality and identity change? What problems will they as well as the native speakers encounter? Necessarily, the new situation entails fundamental changes in the conceptualization of English teaching principles and practices. Some proposals will be raised accordingly while some existing ideas are reviewed. New considerations of such concept as pragmatic competence are also attempted. It will be argued that for the sake of future intercultural peace and harmony, learners as future communicators need to develop the sense of cultural equality and contextual sensitivity and cultivate interactive flexibility and empathy.

【提携学会招待講演3】

Working Memory and an Asymmetry in L2 Processing of English Wh-question

Jin-Hwa Lee (Chung-Ang U.; ALAK)

Moderator: Kawakami, Noriko

(Kagoshima Immaculate Heart U.)

This study explored the relationship between working memory and L2 learners' asymmetry in processing of English subject and object *wh*-questions. L2 researchers have shown that L2 learners are different in processing subject *wh*-questions such as *Who does Mary believe met John?* and object *wh*-questions such as *Who does Mary believe John met?* Yet, the direction of the asymmetry has been in controversy. While many L2 researchers argued for the relative difficulty of subject *wh*-questions, Lee (2010) obtained the opposite result after critically reviewing test materials of the previous studies and rectifying their potential biases. Recent studies on the relationship between working memory and sentence processing shed light on the controversy surrounding the direction of the asymmetry. They found that working memory has a stronger influence on complex structures which require heavier parsing load than simple structures which can be parsed without much demand on working memory capacity. Following this line of thought, it can be inferred that the type of *wh*-questions which shows a higher correlation with working memory capacity is structurally more complex to parse. This study was set out to provide further evidence on the direction of the asymmetry surrounding English *wh*-questions by investigating the relationship between working memory and L2 learners' processing of *wh*-questions. A total of 60 Korean college EFL learners took two working memory tests (conceptual span test and reading span test) and two English *wh*-questions processing tests (elicited comprehension test and grammaticality judgment test). Correlations between working memory tests and *wh*-questions

processing tests were calculated for each of subject and object *wh*-questions. The results are discussed in relation to the direction of the asymmetry and different types of measures.

【提携学会招待講演4】

Utilizing the Project-based Learning Approach to Promote Communication and Cooperation of Rural Thai EFL Students with Different Religious Backgrounds

Pragasit Sitthitikul (Thammasat U.; Thai TESOL)

Moderator: Ishikawa, Shin'ichiro (Kobe U.)

This session features the research that the presenter conducted with the students in the rural area located in the south of Thailand, which consists of people with a mixture of religions, namely Buddhists and Muslims. In order to boost a better understanding and cooperation among these students, besides the language proficiency, the researcher utilized a project-based learning approach in an English foundation course that they had to take to complete the program in a local university there. The principal purpose of this qualitative study aims at improving communication skills as well as cooperation among college EFL students with different religious backgrounds through the project-based learning approach. The presenter will report how the PBL work contributes to the growing of cooperation and communication improvement among these students.

【提携学会招待講演5】

Bringing Facebook and WebQuest into the Writing Class: The Case of Two Teachers

Kok-Eng Tan (Universiti Sains Malaysia; MELTA)

Horibe, Hideo (Hiroshima Institute of Technology)

While the Internet offers a lot of English language teaching resources covering a range of

language skills, proficiency levels and aims, most of the time school teachers have to appropriate them for their own web-based lessons. We still need homegrown teaching tools that are sensitive to local contexts, local examination requirements and students' needs. This will likely have to come out of individual efforts. This paper highlights two online writing tools developed separately by two Malaysian secondary school teachers for their own writing class. The first tool which is intentionally made available via the popular social networking site of Facebook, is aimed at developing narrative writing abilities at Year 10 level. The second tool makes use of lesson templates from WebQuest to conduct argumentative writing lessons for Year 12 students. A study accompanied the development of each tool and was conducted among the target users. Some positive findings of the two studies reported in this paper are encouraging signs for ESL/EFL teachers to explore the use of webbed environments which are rich with materials from around the world to enhance the language learning experience of students.

【提携学会招待講演6】

English for International Understanding (EIU) : Building Bridges and Making Connections in Asia

Alvin Pang

(SEAMEO Regional Language Centre, Singapore)

Moderator: Yamauchi, Hisako

(U. of Nagasaki, Siebold)

English is increasingly used as a language of communication among people of different language groups within the Asian region. Most of these current learners of English are more likely to use English with fellow learners from their own country or people from the region than with "native speakers". Japanese students and working adults travelling overseas in Asia would find themselves using English to communicate and interact with speakers of other languages.

What aspects of communicative competence would they need to develop so as to achieve better communication through using *English for international understanding* (EIU)? What benefits would they derive from cultural awareness and immersion programmes that are specially customized to help them build bridges and make connections with others in Asia through using EIU? What pedagogical implications can language teachers in Japan draw from this presentation when they prepare their students for better communication with other non-native speakers of English from Asia?

This paper reviews and evaluates some cultural awareness and immersion programmes that SEAMEO RELC has conducted for Japanese students from different universities. It discusses the principles underpinning the curriculum design and mode of delivery of the programme. It highlights the importance of having non-native speakers of English to teach and deliver the programmes within *English as a lingua franca* (ELF) communication contexts and demonstrates the effectiveness of not having to defer to the native English speaking minority in Asia for models of acceptable English. It makes an argument that EIU can be taught to overseas students within ELF communication contexts where non-native speakers of English from Asia are likely to meet and use the English language for 'global' use, rather than as a foreign language. The paper concludes with an evaluation study of the effectiveness of the programmes in helping Japanese university students acquire the communicative competence needed for fostering new friendships with others in Asia.

【中国・四国支部企画シンポジウム】

大学英語教師の資質を高める 養成・研修のありかた

提案者：平本哲嗣（安田女子大）
 劔持 淑（岡山大）
 折本 素（愛媛大）
司会：池野 修（愛媛大）

大学英語教育において教員の資質向上のためにどのような工夫がなされるべきであろうか。教育基本法でその理念が謳われているように、高等教育機関においても「養成と研修の充実」が求められている。このシンポジウムでは、昨今の大学英語教育事情を踏まえつつ、教員の資質を高めるための組織的取り組みについて紹介する。さらに「英語教員としての成長」に影響を与える諸要因について議論する。

「自らの実践を振り返ることのできる教育環境を模索する」（平本）

大学設置基準（2008）では「単位の実質化」に伴い、学生の学修時間を確保することの重要性が言及されている。では、指導に当たる側の教員においては、自分の授業において準備、授業毎の振り返り、また授業成果評価のための時間が十分確保されていると言えるだろうか。本発表では、これらの状況を鑑みつつ、大学英語教員の資質向上において今後検討が必要な課題について、具体的事例を参照しつつ論じる。

「岡山大学言語教育センターにおける英語教員FD研修について」（劔持）

言語教育センター英語系では、毎年のFD活動として、Teacher Development Workshop や Our Share を実施している。カリキュラムについて共通認識を持つように努めるとともに、英語教員間での教授法や教材についての意見交換を行う。近年のFD活動事例と課題、および今後の展望について紹介する。

「大学教育の質 向上を目指したマクロ的取り組みとミクロ的取り組み～愛媛大学の事例から～」
（折本）

大学教育の質向上のためには、各学部独自の取

り組みとともに、学部を超えた全学的な取り組みが必要となる。本発表では、全学的な教育の質向上に資するために設置された愛媛大学の教育コーディネーター制度やテニユアトラック制度を紹介し、マクロレベルの大学教育および大学教員の質向上の一つのあり方を提起する。さらに、ミクロレベルの大学「英語」教員の質向上の取り組みに関しても、具体例をあげながら、話題提供をおこなう。

【賛助会員特別シンポジウム】

全入学者対象の少人数英語教育プログラム —成果と課題— 〈日本語検定協会企画〉

提案者：板津木綿子（東京大）
 岩田 祐子（国際基督教大）
 諸井 貴子（立教大）
Mackenzie, Graham (British Council)
塩崎 修健（日本語検定協会）

グローバル人材育成の号令の下、英語教育は初中等を問わず改革の議論が続いている。「英語教育の低年齢化」「教員の英語運用力把握と指導力向上」「大学入試の4技能化」「外国人教員比率の向上」などのキーワードがメディアを賑わすことも多々あり、東京オリンピックを一つのマイルストーンとした一連の教育改革と相まって、英語教育の行方はかつてないほど注目が集まっている。そのような各種施策が賛否を巻き起こす中で、「クラスサイズの少人数化」が効果的であることは、誰もが認める方向性であることは間違いないであろう。本シンポジウムでは、全入学者対象の先進的小人数英語教育プログラムを実施している3大学からスピーカーをお招きし、各プログラムの特色やコンテンツを紹介する。また、英語プログラムのアウトソース先としての代表格であるブリティッシュカウンシルの視点も加え、その成果と課題について議論を深めていく。

【特別シンポジウム】

大学英語教育における 『教育の質保証』に向けて — 『外部試験』導入の議論を通じて—

提案者：西川美香子（日本英語検定協会）
安藤 益代
（国際ビジネスコミュニケーション協会）
根本 斉氏（国際教育交換協議会）
司会者：尾関 直子（明治大）

2013年8月に京都大学で行われた大学英語教育学会第52回（2013年度）国際大会の2つの全体シンポジウムでは、国内の英語教育関連学会、および国内の英語教育学会の代表者による提案と議論を通じて、「教育再生実行会議で提案された大学入試制度（英語）の改革案について」（通称「京都アピール」）が最終提言された。「京都アピール」では、教育再生実行会議が主に改革の対象として挙げている大学入試制度改革に伝える形で提言がまとめられている。しかしながら、大学入試制度の対とも言うべき卒業生に対する「教育の質保証」については、追記に「大学卒業時に、各大学の学部・学科に応じてTOEFL等の外部試験を活用することは検討に値する」とまとめられたに過ぎなかった。このようなある種のアンバランスが生じたのは、大学入試制度改革の話題が社会的にも大きな反響を呼び、学界にとっても喫緊の検討課題であったが故のことであり、時間的に限られた中においては仕方のない側面もある。

今年の特別シンポジウムでは、昨年の全体シンポジウムの最終提言を受け、ますます日本社会、とりわけ産業界からの要請が高まっている、大学における「教育の質保証」の問題について取り上げたい。英語教育における「教育の質保証」を考えたとき、大学においては「単位」（および、その単位の基となる点数）が一定の意味を持っているが、「外部試験の点数」も同じような意味を持っている。また、そのような現状を反映して、外部試験の点数に応じて「単位」を与える大学も、もはや珍しくはない。このように、英語教育における「教育の質保証」と「外部試験」というのは非常に密接な関係にある。したがって、今回のシンポジウムには、現在、多くの日本人が受験する国際的外部試験の実施団体（日本英語検定協会（英

検・IELTS）、国際ビジネスコミュニケーション協会（TOEIC）、国際教育交換協議会（TOEFL））をパネリストとして招き、各団体の考える「教育の質保証」について提案していただく。

英語教育における「教育の質保証」について考えるとき、もう一つ忘れてはならないのが、質保証の基準となる「評価基準」である。英語教育における質の保証とは、「一定の英語能力を有していること」を保証することに他ならないが、実のところ「英語能力」がどのように定義されるのかについては統一的な見解は存在しない。そのことが英語教育における質保証を考えるときに議論を一層複雑なものにしていると考えられる。言語使用という観点から、語彙や文法、4技能というものが最も基本的な能力であり、言語コミュニケーションを支えているということに異議を唱える者は少ないであろうが、しかし、それだけが英語能力の全てであるという意見に賛同する者もまた少ないであろう。とりわけ、大学における英語教育では、アカデミックスキルズやクリティカルシンキングなどの広義の言語技能に関する能力が重要である。また、英語という言語そのものの性質や英語を取り巻く文化や歴史といった一かつては、それは教養と呼ばれた一言語運用能力以外の知識や理解を涵養することも重要な役割と考える者もいる。

もとより統一的な質保証のあり方を定めることは不可能であるが、本シンポジウムでは大学における「英語能力とは何か」という議論を通じて、大学英語教育における「評価」がどのような方向を目指すべきかについての共通理解を深める場としたい。

【全体シンポジウム】

Teaching English for Peace: Fostering Global Citizenship

Panelists: : Kip A. Cates (Tottori U.)
Craig Smith (Kyoto U. of Foreign Studies)
Moderator / Panelist: Asakawa, Kazuya
(Tokai Gakuen U.)

How can language teachers contribute to international understanding between peoples, countries and cultures? How can teaching

English at colleges and universities foster peace and global citizenship?

This symposium will feature an international panel of language educators active in peace and global education who will discuss the role that college English teachers can play in promoting the knowledge, skills and attitudes needed to achieve peace in our multicultural world.

Education for peace involves three dimensions: teaching about, teaching for and teaching in:

- Teaching about concerns content: fostering an understanding of the world, its peoples and problems through content-based teaching on global themes.
- Teaching for concerns skills: helping students develop skills of critical thinking, media literacy, problem solving and conflict resolution.
- Teaching in concerns method: promoting peace through peaceful means using humanistic teaching to create classrooms free of prejudice, bullying and hate.

This approach sees English as an international language for promoting social responsibility and global citizenship. It sees the classroom as a window to the world where students acquire language skills while exploring issues of global importance. It sees the learning process as a journey towards personal growth, mutual respect and cross-cultural communication. It sees teaching objectives as not just to improve test scores, but to promote the tolerance and empathy needed in our troubled world. It sees the role of education as giving students opportunities beyond the classroom to use their language skills in real-world situations in the local and global community.

English teachers in Japan have opportunities to help their students connect with people around the globe in ways that enhance the quality of their shared lives. As awareness of the issues that divide and threaten our world grow more sophisticated, many of our students see that English communication skills will allow them to shine the light of their natural compassion and commonsense on old and absurd problems.

We are teaching in the midst of a revolution in the means of communication that can enhance the role of individuals in building a consensus for peace and justice everywhere. At the same time, our global interconnectedness may amplify the dangers of miscommunication and the impact of malicious actions. The hyper-connectedness that our students live in today has the potential to push the peoples of the world apart or to create a sense of unity that we are all part of a Global Family.

Will our youth join with people around the world to face their common future as family and friends, or as foes? The responsibility of nurturing a sense of peace and global citizenship among our students is a challenge that we should treasure as English language educators.

.....

【大会記録】

大会発表件数・展示参加団体数報告

第53回国際大会の発表件数は、基調講演2件、特別招待講演1件、招待講演8件、全体シンポジウム1件、特別シンポジウム1件、団体会員特別シンポジウム1件、支部企画シンポジウム1件、特別委員会報告3件、研究発表71件（内、学生枠6件）、実践報告25件（内、学生枠2件）、シンポジウム7件、ワークショップ6件、賛助会員発表8件、ポスターセッション12件、特別企画ポスターセッション46件、合計195件であった。また、賛助会員による展示は37社（53スペース）であった。

（文責 馬場千秋）

.....

【大学英語教育学会 第54回 (2015年度) 国際大会】

The JACET 54th (2015)
International Convention

開催期間：2015年8月29日（土）、30日（日）、

31日(月)

開催校：鹿児島大学郡元キャンパス

住所：〒892-8580

鹿児島県鹿児島市郡元 1-21-24

大会テーマ：

グローバル時代の異文化間コミュニケーション能力と英語教育

Intercultural Communicative Competence and English Language Education in a Globalized World

講演者：

Claire Kramersch氏

(カリフォルニア大学バークレー校教授)

専門分野：Cultural Studies, Language Acquisition, Language Socialization and Development, Literacy, Writing and Literature

Daniel Perrin氏

(チューリッヒ大学教授 AILA 事務局長)

専門分野：Media (Languages and Linguistics), Media Studies, Applied Linguistics, Communication, Professional Writing, Realist Social Theory, and Realism, Language and Communication

Celeste Kinginger氏

(ペンシルベニア大学教授)

専門分野：Sociocultural Approaches to Foreign Language Teaching and Learning, Study Abroad, Second Language Pragmatics, Narrative and Case Study in Applied Linguistics

大会趣旨：

大学英語教育学会第54回(2015年度)国際大会の目的は、現代のグローバル化された世界における異文化間コミュニケーション能力とそれを支える英語教育の有効な役割と社会的使命に光を当てることである。

海を越え、国境を越えてグローバル化された社会の拡大に伴い、英語は今日の世界においてより必要不可欠な世界共通語となり、それに伴い、よりバランスのとれた英語教育を目指した熱意ある教育動向や教育改革を誘発していると言える。まさしくそこに求められているものは、世界を取り

巻く多様な学際性と様々な社会環境を考察することが求められているのである。この新しい方向に鑑みて、政治、経済に導かれた地政学的な環境が、現代のグローバル化促進の中心的役割を果たしていることを我々は認識する必要がある。この現実を認識する一方で、我々は異文化理解の中心的要素を理解する大切さを決して過小評価してはならないのである。

歴史が示すように、異文化の格差を理解するためには、人種、宗教、イデオロギーの諸問題から、食物、衣服、音楽に関わる諸問題まで、広範な社会文化、社会言語学レベルに注目すべきことが求められている。もう一つの関心領域は、個々の民族や地方において独自に生まれ大切にされてきた様々な伝達様式に存在している。このことは、より総合的、幅広い観点から言語教育や言語学習を見ていく必要を意味している。

多面的視点から英語教授法と英語運用能力を考察していくことは、世界の主たる潮流となった。従って、上述のようなより確実で焦点化された方法で異文化理解の問題を再考して文化間の格差を解決することは極めて生産的なことであろう。これは、物質的豊かさではなく、世界の人々の共存共栄のためである。このゴールは、永続的な人類の絆と深い異文化理解の確立により、具現化する必要がある。このことを念頭に置いて、バランスのとれた方法で、つまり拡大し続けるグローバル化と何世紀にも及ぶ異文化遺産の継承に目を向けながら、英語教育と異文化間コミュニケーション能力の獲得が実働化されねばならない。我々は、そのような新しい時代を迎えているのである。

The objective of the JACET 54th (2015) International Convention lies in highlighting the potent roles and social missions of cross-cultural communicative competence and supportive English language education in a contemporary globalized world.

With the expansion of globalized societies across oceans and boundaries, English has become a more indispensable lingua franca in today's world, thereby triggering more enthusiastic educational trends and pedagogical reforms aimed at how to teach the English language in a well-balanced manner. Indeed,

it is important to consider multiple disciplines and various social circumstances around the world. Noting this new direction, we need to acknowledge that politics- and economy-led geopolitical circumstances are playing a pivotal role in promoting contemporary globalization. While recognizing this reality, we should never underestimate the importance of understanding the core essence of cross-cultural communication.

As history witnesses, understanding cultural gaps requires us to look into far-reaching sociocultural and sociolinguistic levels, ranging from issues on race, religion, and ideology to the ones related to food, clothing, and music. Another area of interest lies in various communication styles that have been uniquely fostered and cherished in individual ethnic groups and local regions. This implies the necessity of our looking into language education and language learning from a more holistic and wider viewpoint.

Considering English teaching methods and language capability from multi-faceted standpoints has become a major trend around the world. Hence, it would be highly productive to reconsider the issue of how to understand and resolve cultural gaps in a more authentic and focused way as noted above. This is not because of material affluence, but because of coexistence and mutual prosperity among global peoples. This goal must be exemplified by establishing long-lasting human bonds and deeper levels of cross-cultural understanding. With this notion in mind, we are greeting a new era, where English language education and intercultural communicative competence should be implemented and then developed in a well-balanced manner: focusing on expanding global trends, and sustaining centuries-long cross-cultural heritages.

.....

2014年度JACET賞

2014年度JACET賞

JACET賞選考委員会は昨年10月に審査を開始し、学術賞1件、実践賞1件を2014年度JACET賞候補とし、本年6月理事会で本年度受賞者として決定しました。また、第53回国際大会において大学英語教育学会賞新人発表部門1件が選出され、以上の計3件について、8月29日に同大会において授賞式が挙行されました。

受賞者と対象となった業績は以下の通りです。
受賞者の皆様には心よりお慶び申し上げます。

学術部門

業績名：『学習英文法を見直したい』（研究社、2012年7月31日発行）

授賞者：大津由紀雄氏（編集・執筆・明海大学）、鳥飼玖美子氏（執筆・立教大学）、岡田伸夫氏（同・関西外国語大学）、田地野彰氏（同・京都大学）

授賞理由：「英文法」が軽視されてきた現在、時宜にかなった企画で、英文法教育の改善に役立つ著書である。20人に及ぶ著者が多角的な角度（基礎、方法論、内容論、活用編と展望）で論じられているので、基本的な考え方から実用的な授業の展開まで幅広く簡潔に学ぶことができる。

実践部門

業績名：『文学教材実践ハンドブック—英語教育を活性化する—』（英宝社、2013年9月30日発行）

授賞者：編著者：吉村俊子氏（花園大学）、安田優氏（北陸大学）、石本哲子氏（大谷大学）、齋藤安以子氏（摂南大学）、坂本輝世氏（同志社大学）、幸重美津子氏（京都外国語大学）

執筆者のJACET会員：野口ジュディー氏（武庫川女子大学）、森永弘司氏（同志社大学）、竹村理世氏（同志社大学（会員管理では立命館大学非常勤））、松岡信哉氏（龍谷大学）、田中敦子氏（関西外国語大学）、Pavloska, Susan氏（同志社大学）、藤澤良行氏（大阪樟蔭女子大学）、多田稔氏

授賞理由：7名の編者により、27名の執筆者が実践を踏まえて、教材作品の選択、実施クラスでの学生の状況、時間の割り振り、学生の学習活動とフィードバックを具体的に記し、文学教材を用いての英語授業の成果を記している。各執筆者の真

摯な実践が全体の独自性を生み出しており、意欲的な発信型の授業方法は現時点での標準を十分に超えている。

新人発表部門

受賞者：加藤由崇（京都大学大学院生）

対象業績：研究発表 “Helping Learners to Improve Their Speaking Skills: How Should We Encourage Them to Reflect on Their Own Speech?”（大学英語教育学会第53回（2014年度）国際大会 2014年8月28日発表）

授賞理由：This is a skill-integrated, reflective approach to improving university students' English speaking ability. Mr. Kato compared the effects of two different types of speech reflection: transcription and proof-listening. He suggests the two types should be used for different pedagogical purposes: correcting local errors related to language forms and global errors related to meaning. This seems to be an effective approach to fostering learners' speaking skills at university level. As a reflective practitioner and researcher, Mr. Kato is expected to promote his professional growth through reflective teaching cycles and help his students to be more reflective and autonomous language learners.

（JACET賞運営委員会）

本部だより

代表幹事 大須賀直子（明治大学）

8月の広島国際大会には、天候不順の折にもかかわらず、たくさんの会員の方に参加していただきまして誠にありがとうございました。大変な状況の中でご尽力くださった中国四国支部の皆様にも心より御礼申し上げます。

また、10月1日の公示より、JACET初の社員選挙が始まっております。会員の皆様方にはご理解、ご協力をいただきましてありがとうございます。10月31日（消印有効）に立候補及び他薦の受付を締め切り、集計を行いまして、12月15日には社員選出の公示を行う予定です。その後1月13日までが異議申し立て期間になりますので、引き

続きご協力を宜しくお願いいたします。

さて、本部からは6月22日に行われました社員総会議事録、8月28日に行われました会員総会議事録、平成25年度事業状況報告書、収支計算書、財産目録、監事監査報告書をお知らせいたします。

一般社団法人 大学英語教育学会 平成26(2014)年度定時社員総会議事録

日 時：平成26年6月22日（日）

15:00～16:00

会議場：早稲田大学（早稲田キャンパス）26号館
502教室（東京都新宿区西早稲田1-6-1）

総社員数：125名

出席社員数：94名

内訳 本人出席 5名（出席者名簿別添）

委任状出席 89名（委任状出席者名簿別添）

よって『定款』第18条および第20条の規定の定足数以上を充足

（＊第18条および第20条による過半数は 63名）

陪席者：21名（陪席者名簿別添）

議 長：上田倫史

議事録署名人：大須賀直子、馬場千秋

議事録作成者：上田倫史

I. 開会

河野円総務担当理事より、定款所定の定足数を満たした旨の報告があり、社員総会の開会が宣言された。なお、社員の水本篤氏が3月31日付で退会され、現在の総社員数は125名であることが報告された。

II. 会長挨拶

神保尚武会長より、一般社団法人大学英語教育学会の平成25年度の活動報告・決算について慎重に審議をお願いしたいとの挨拶があった。

III. 議長選出

河野円総務担当理事が議長の選出について諮ったところ、議長に上田倫史氏が選出された。

IV. 議事録署名人選出

議長が議案審議に先立ち、議長の他の議事録署

名人2名について、大須賀直子氏と馬場千秋氏の両名を指名したい旨を述べたところ、異議なく可決された。

V. 審議案件

第1号議案 平成25（2013）年度事業報告・収支決算の件

1. 平成25（2013）年度事業報告

河野円総務担当理事より、平成25（2013）年度事業報告の説明があり、下記1～6号事業がすべて可決された。

- (1) 1号事業 大会、セミナー等事業
- (2) 2号事業 出版物刊行事業
- (3) 3号事業 表彰事業
- (4) 4号事業 協力事業
- (5) 5号事業 調査研究事業
- (6) 6号事業 その他法人事業

2. 平成25（2013）年度決算

浅川和也財務担当理事より、平成25（2013）年度の決算報告があり、可決された。

3. 平成25（2013）年度その他報告

河野円総務担当理事より、平成25（2013）年度に交わされた契約、当学会の共催、協賛名義使用の許可を行った他団体の行事、その他販売書籍印税等に関して報告があり、可決された。

4. 公益目的支出計画実施報告

河野円総務担当理事より、当定時社員総会第1号議案2項で可決された平成25（2013）年度の決算に基づく、公益目的支出計画平成25（2013）年度実施報告書案の説明があり、可決された。公益目的支出計画は、予定どおり行われ、計画通り平成29（2017）年3月31日に終了する予定である。これをもって、内閣府へ公益目的支出計画実施報告を行うことが可決された。

5. 監事監査報告

見上晃監事および駒田誠監事より、平成25（2013）年度の業務および会計について適正であった旨の監査報告があり、可決された。

6. 公益目的支出計画実施報告書に関する監査報告

見上晃監事および駒田誠監事より、公益目的支

出計画実施状況の調査および公益目的支出計画実施報告書を検討した結果、同報告書は、その実施状況に対して適正である旨の報告があり、可決された。

VI. 報告

1. 会員異動状況報告

河野円総務担当理事より、平成25（2013）年度会員異動状況について報告があった。

2. 平成26（2014）年度事業計画および収支予算

河野円総務担当理事より、平成26（2014）年度の事業計画および人事について説明があった。また、浅川和也財務担当理事より、事業計画に基づいた収支予算について説明があった。

3. 現行規程報告

河野円総務担当理事より、一般社団法人に移行したことに伴い、各種規定、ガイドライン等の改正が行われた旨、報告があった。

VII. 閉会

以上をもって一般社団法人大学英語教育学会定時社員総会の議事を終了したので、議長は閉会を宣した。

上記の決議を明確にするため、議長（議事録作成者）及び議事録署名人は、次に署名押印する。

平成26（2014）年6月22日

一般社団法人大学英語教育学会
平成26（2014）年度定時社員総会
議長 上田 倫史
議事録署名人 大須賀 直子
議事録署名人 馬場 千秋

以上

2014年度 一般社団法人 大学英語教育学会 会員総会議事録

日時：2014年8月28日（木）12:25～13:05

場所：広島市立大学講堂

司会：大須賀直子（代表幹事）

書記：上田倫史（副代表幹事）

I. 開会

司会の大須賀直子代表幹事により、会員総会の開会が宣言された。

II. 会長挨拶

神保尚武会長より、「昨年度の活動、会計、及び今年度の活動計画の説明をさせていただきたい」旨の挨拶があった。

III. 報告

1. 総務関係

野野田総務担当理事より、資料に基づき、2014年度会員状況報告（1頁）、JACET創立以来の会員数（2頁）、2013年度活動報告（3-8頁）、2014年度活動計画（9-15頁）に関する説明があった。

また、平成26年3月31日にJACETに貢献された以下の方々に感謝状が送付されたとの報告があった。

理事経験者（敬称略）：

石川祥一（1997/4/1-2008/3/31）

監事経験者（敬称略）：

矢田裕士（2005/4/1-2012/3/31）

2. 財務関係

浅川和也財務担当理事より、資料に基づき、2013年度決算報告（16-24頁）、公益目的支出計画実施報告（25頁）、2014年度予算（28-31頁）に関する説明があった。

また、監事監査報告および公益目的支出計画実施報告書に関する監査報告があり、業務および会計に関して適正に運営されている旨報告があった。

3. 役員関係

野野田総務担当理事より、資料に基づき、2014年度役員（32-35頁）に関する説明があった。

4. 社員選挙について

野野田総務担当理事より、2015年-2016年度社員選挙実施についての説明があり、会員へ社員選挙実施に関して協力の要請があった。

5. グローバル人材育成特別企画について

野野田総務担当理事より、ポスタープレゼンテーションを本大会において開催している旨の報告があった。

IV. 質疑応答（会員からの意見）

・「社員を選ぶ際に拒否権を認めるべきである」という意見が出た。これに対し、今回が初めての社員選挙であり、慎重に日程や選挙プロセスを検討した結果、今回は現在示している案で社員選挙を行い、その後問題点を調査し、次回以降の社員選挙で改善していくという回答がなされた。

・「資料の28-31ページにかけての表の一部が黒くつぶしているところは斜め線にした方がよい」という意見が会員から出た。これに対して対処をするという回答がなされた。

V. 閉会

以上をもって一般社団法人大学英語教育学会会員総会の議事を終了したので、司会は閉会を宣した。

一般社団法人 大学英語教育学会 平成25（2013）年度事業状況報告書

定款第5条第1項の（1）から（6）に掲げる平成25年度の事業計画実施概要の報告は下記の通りです。

記

1号事業報告：大会セミナー等事業

（1）第52回（2013年度）国際大会の開催

平成25年8月30日から9月1日まで京都大学吉田キャンパス（京都市左京区）において、「英語教育の連携と相対化」をテーマに第52回（2013年度）国際大会を開催した。参加者数約1200人。基調講演3件、海外提携学会代表による招待講演7件、国内招待講演2件、全体シンポジウム2件、団体会員特別シンポジウム1件、特別委員会報告2件が行われた。また、関西支部企画シンポジウム1件、関西支部企画ワークショップ2件が行われた。さらに、グローバル人材育成シンポジウム

1件、グローバル人材育成特別企画ポスターセッション85件が行われた。その他、研究発表、実践報告、事例研究、シンポジウム、ポスターセッション、ワークショップの分野で発表が行われた。最後に、「教育再生実行会議で提案された大学入試制度（英語）の改革案についての意見書」（通称「京都アピール」）が採択された。

会員には、11月に刊行した『JACET通信189号』にて全体報告と、基調講演、全体シンポジウム等に関する報告を行い、学会ウェブサイトにも掲載した。後援名義許可をいただいた文部科学省、京都大学高等教育研究開発推進センター、京都府教育委員会、京都市教育委員会に事業実績、決算報告を行った。また、「教育再生実行会議で提案された大学入試制度（英語）の改革案についての意見書」（通称「京都アピール」）が『英語教育』2013年11月号（第62巻第9号）pp.62-64に掲載された。

(2) サマーセミナーの開催

平成25年8月20日から23日に関東甲信越地区国立大学法人等共同利用施設草津セミナーハウスにおいて参加者51名でJACET第40回（2013年度）サマーセミナーを行った。“Motivation and autonomy: researching and methodological perspectives in language learning”のテーマのもと、メイン講師にDr. Ema Ushioda (University of Warwick)、また、国内から中谷安男氏（法政大学）、竹内理氏（関西大学）を迎え、公募による参加者の発表も行った。活発な論議が展開され、参加者からも好評であった。講演および発表内容をプロシーディングとしてまとめて刊行した。

(3) 英語教育セミナーの開催

平成25年11月3日に早稲田大学において、「JACET第1回（2013年度）英語教育セミナーと教材展示—英語教材と指導法の今」をテーマに英語教育セミナーが行われた。吉田研作氏の講演と賛助会員12社と関連の発表40程度を実施し、教材展示などを併せ実践的な面から英語教材と指導法の今を考えた。小学、中学、高校、大学等の英語教員、および英語教育関係者約250名が集まり、講演、質疑応答、討議を通じて、知見を深め、実践に役立てることができた。

(4) 支部大会の開催

以下のように各地で支部大会を開催した。支部大会で披露された研究成果や知見が各研究者の研

究活動に大きな道標となった。また、研究大会については、各支部ニューズレターで報告された。

- ・北海道支部大会 平成25年7月6日
- ・東北支部大会 平成25年7月6日
- ・関東支部大会 平成25年6月16日
- ・中部支部大会 平成25年6月1日
- ・関西支部大会 平成25年11月9日
- ・中国・四国支部大会
(春季) 平成25年6月8日
(秋季) 平成25年10月26日
- ・九州・沖縄大会 平成25年7月6日

(5) 支部講演会の開催

以下のように各支部において講演会が開催された。講演会で披露された研究成果や知見が各研究者の研究活動の大きな道標となった。

- ・関東支部講演会
平成25年4月13日、9月14日、10月5日、
12月14日、平成26年1月11日
- ・中部支部講演会
平成25年10月5日
- ・関西支部1～3回講演会
平成25年7月13日、10月5日、
平成26年3月8日
- ・九州・沖縄支部学術講演会
(春期) 平成25年6月8日
(秋期) 平成25年10月26日

(6) 支部研究会等の開催

以下のように各支部において研究会が開催され、これらの研究会で披露された研究成果や知見が各研究者の研究活動の大きな道標となった。

- ・北海道支部研究会
平成25年5月25日、11月16日、
平成26年3月8日
- ・東北支部例会
平成25年12月7日
- ・関東支部月例研究会
平成25年5月11日、7月6日、11月9日
- ・中部支部
平成25年12月21日、平成26年3月1日
- ・中国・四国地区大学間連携イベント大学生 Oral Presentation & Performance (OPP) 研究会
平成25年12月15日

2号事業報告：出版物刊行事業

(1) 『紀要』の刊行

①平成25年10月31日に『JACET Journal』57号を刊行。掲載論文4件。

②平成26年3月30日に『JACET Journal』58号を刊行。掲載論文8件。

会員より応募された論文、リサーチ・ノート、及びブックレビューの3つの分野における論文を厳正に審査し、掲載、非掲載を決定した。それぞれ会員及び英語教育関係者、及び国立国会図書館、国立情報学研究所へ送付した。海外提携学会等へも送付し、日本の英語教育研究の最新情報を発信した。

(2) 『Selected Papers』の作成準備

国際大会で口頭発表（一般ポスター発表も含む）した発表者の学術研究を奨励し、論文発表の機会を与え、また英語教育および応用言語学における広い知識を提供し、さらに海外の学会や英語教育関係者にたいして日本の研究を発信するために、Selected Papersを発行することとなり、論文を募集し、今年度は選考に回すところまで行った。平成26年8月に電子ジャーナル（オンライン）として発行予定である。

(3) 『JACET通信』の刊行

①平成25年7月1日に『JACET通信』188号（日本語、ウェブ版）を刊行。

②平成25年12月1日に『JACET通信』189号（日本語、印刷版およびウェブ版）を刊行。

③平成26年3月1日に『JACET通信』190号（英語、ウェブ版）を刊行。

以上、合計3回の通信の刊行を行い、大学英語教育関連の情報発信に寄与した。学会の最近の動向や優秀な大学英語教育を紹介することにより、会員の大学英語教員としての意識を向上させることができた。また、国内の他学会からの寄稿により、学際的な教育や研究の動向を知ることができた。

(4) 支部紀要の発行

各支部で紀要を発行し、会員及び英語教育関係者等へ送付した。支部紀要は、支部会員の学術研究を奨励し、論文発表の機会を与えた。また、日本の英語教育研究の最新情報を発信した。

- ・『北海道支部紀要』平成26年2月22日
- ・『TOHOKU TEFL (JACET支部紀要)』5号
平成26年3月31日
- ・『関東支部紀要』1号
平成26年3月31日

・『中部支部紀要』11号

平成25年12月20日

・『JACET関西支部紀要』16号

平成26年3月31日

・『大学英語教育学会中国・四国支部紀要』11号

平成26年3月31日

・『Annual Review of English Learning and Teaching』18号 平成25年11月30日

(5) 支部ニューズレターの発行

各支部でニューズレターを発行し、支部活動動向や、支部会員への英語教育に関する情報提供と情報交換を行った。

・JACET東北支部通信40号

平成26年3月31日

・関東支部ニューズレター1号

平成25年11月1日

・関東支部ニューズレター2号

平成26年3月31日

・JACET Chubu Newsletter No.30

平成25年5月10日

・JACET Chubu Newsletter No.31

平成25年12月20日

・関西支部ニューズレター64号

平成25年4月1日

・関西支部ニューズレター65号

平成25年5月26日

・関西支部ニューズレター66号

平成25年7月27日

・関西支部ニューズレター67号

平成25年10月12日

・中国・四国支部ニューズレター11号

平成25年9月5日

・中国・四国支部ニューズレター12号

平成26年1月31日

・九州・沖縄支部ニューズレター29号

平成25年4月15日

3号事業報告：表彰事業

(1) 大学英語教育学会賞の表彰

第52回（2013年度）国際大会の最終日（平成25年9月1日）に英語教育における研究または実践上の顕著な業績を通してわが国における大学英語教育の改善と進歩・発展に寄与した本学会員である個人または団体に対して表彰を行った。受賞者に対しては賞状とともに記念品を贈呈した。

平成25年度（旧 社団法人大学英語教育学会の規定による）

学術賞 林日出男著『動機づけ視点で見る日本人の英語学習：内発的・外発的動機づけを軸に』金星堂. 2012.

実践賞 江川美知子 宇都宮大学の総合的多面的英語教育改革の計画、実践、評価に関する優れた貢献

新人賞 藤尾美佐著 Communication Strategies in Action: The Negotiation, Establishment, and Confirmation of Common Ground 成美堂. 2011
平成25年度（新 一般社団法人大学英語教育学会の規定による）

新人発表部門 中竹真依子 研究発表「ライティングセンターにおけるチュートリアルへのフィードバック分析—自立した書き手の育成に関する一考察」（第52回（2013年度）国際大会 8月31日発表）

4号事業報告：協力事業

(1) 関係学術団体への派遣

①RELC (Regional Language Centre)

平成25年3月18日から20日にシンガポール共和国で開催されたRELC Seminar 2013に本学会より学会代表者を1名派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

②KATE (The Korea Association of Teachers of English)

平成25年7月5日から6日に大韓民国で開催されたKATE 2013 International Conferenceに本学会より学会代表者を1名派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

③ALAK (The Applied Linguistics Association of Korea)

平成25年10月5日に大韓民国で開催されたALAK 2013 International Conferenceに本学会より学会代表者を1名派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

④ETA-ROC (English Teachers' Association of Republic of China)

平成25年11月8日から10日に台湾で開催されたThe 22nd International Symposium and Book Fair on English Teachingに本学会より学会代表者を1名派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

⑤MELTA (Malaysian English Language Teaching Association)

平成25年5月28日から30日にマレーシアで開催された21st MELTA International Conferenceに本学会より学会代表者を1名派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

⑥PKETA (Pan-Korea English Teachers Association)

平成25年9月28日に大韓民国で開催されたPKETA大会に本学会代表者1名を派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

⑦Thai TESOL (Thailand TESOL)

平成26年1月17日から18日にタイ王国で開催された第34回Thai TESOL国際大会に本学会代表者1名を派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

⑧AILA EBIC

平成25年9月8日から12日にブラジルで開催されたAILA国際大会に本学会代表者を1名派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。EBICミーティングに参加し、AILA-East Asiaの開催について関係学会と話し合った。

(2) 提携学会からの代表者受け入れ

第52回（2013年度）国際大会および支部大会において提携学会からの代表者を受け入れ、招待講演に係る手配やアテンドを行い友好的な関係を促進した。

(3) 提携学会派遣代表者とビジネスミーティング

大学英語教育学会の提携学会からの代表者と第52回（2013年度）国際大会の2日目（平成25年8月31日）に情報交換と今後の今日協力体制について話し合った。結果は運営会議にて報告した。

5号事業報告：調査研究事業

(1) ICT調査研究

①シンポジウムの開催

平成25年6月16日に青山学院大学において、また平成25年9月1日に第52回（2013年度）国際大会においてJACET-ICT調査研究特別委員会特別企画としてシンポジウムを開催した。全国で行われているICTを活用した語学授業実践の最前

線について発表し、情報を交換した。

②講演会の開催

平成25年11月19日に早稲田大学で、平成26年3月18日に青山学院大学で次世代e-Learning Forumを開催し、全国会員に向け講習会・講演会を行った。本講演会の成果は、報告書に掲載する。

(2) EBP調査研究

平成24年4月1日から平成26年3月31日の2年間、EBP (English for Business Purposes) 委員会として、企業の国際部門責任者が社員に期待する英語コミュニケーション能力に関する調査(産学連携プロジェクト)(一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会とJACET-ESP研究会との共同研究)を行った。その2年目として、JACETとIIBCの合同研究会議を8回、研究打ち合わせを5回、ESP研究会全国会議を開催した。平成25年6月29日にJACET ESP関東6月研究会において、平成25年7月8日にオーストリアのウィーン大学において、平成25年8月30日にJACET第52回国際大会において、平成25年10月5日にJACET関西支部第2回公演会において、平成25年10月26日にフィリピンのマニラ大学において、平成26年3月1日に早稲田大学において、それぞれ研究発表を行った。

(3) 基本語改訂

基本語改訂特別委員会を計4回、執行部会を2回開催し、改訂方針の作成、作業部会委員の選考、ベースリストの承認、検証割り当て等を行った。

(4) 専門分野別の研究会活動

現在42研究会があり、各研究会はそれぞれの分野の調査研究を基盤として、会員の資質向上、書籍出版、教材開発、紀要等での論文発表などの活動を定期的に行った。研究会担当委員会はそれらの各研究会の活動を支援した。その結果、本活動が会員・非会員相互の専門知識と技術の向上及び大学英語教育の発展にも寄与することができた。

(5) その他の調査研究

第52回(2013年度)国際大会で会員から「グローバルポスタープレゼンテーション」を募集し、その運営と、成果物として『報告書(含むCD)』を文部科学省へ提出した。また、同大会最終日に採択された3学会による「教育再生実行会議で提案された大学入試制度(英語)の改革案についての意見書」(通称「京都アピール」)の作成の下準備を行うとともに、JACETによる「意見書」の作成の準備をした。

備を行うとともに、JACETによる「意見書」の作成の準備をした。

6号事業報告：その他 法人事業

(1) 一般社団法人への移行認可申請

平成25年4月1日より特例民法法人から一般社団法人へ移行し、一般社団法人大学英語教育学会として登記手続きを行った。ウェブサイト等で内容を報告した。

(2) 諸会議の開催

- ①平成25年5月26日 平成25年度第1回理事会
- ②平成25年6月23日 平成25年度第2回理事会
- ③平成25年6月23日 平成25年度第1回定時社員総会
- ④平成25年6月23日 平成25年度第3回理事会
- ⑤平成25年8月29日 平成25年度第4回理事会
- ⑥平成25年12月22日 平成25年度第5回理事会
- ⑦平成26年3月22日 平成25年度第6回理事会
- ⑧運営会議の開催。4月、10月、3月に合計3回の運営会議を行った。

(3) その他の委員会の開催

定例の運営委員会、支部委員会、支部総会、支部役員会を適宜行った。

(4) 『会員名簿』の刊行

会員情報の提供、定款等規則の開示を目的として『一般社団法人大学英語教育学会(JACET)会員名簿』を平成25年12月1日に発行した。

一般社団法人 大学英語教育学会
平成25年度収支計算書

(平成25年4月1日から平成26年3月31日まで)

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
①基本財産運用収入			
基本財産利息収入	50,000	39,046	10,954
②入会金収入			
入会金収入	200,000	237,000	△ 37,000
③会費収入			
一般会員会費収入	19,048,000	18,442,000	606,000
学生会員会費収入	1,000,000	738,000	262,000
維持会員会費収入	312,000	208,000	104,000
賛助会員会費収入	1,800,000	2,010,000	△ 210,000
団体会員会費収入	640,000	620,000	20,000
会費収入計	22,800,000	22,018,000	782,000
④事業収入			
展示・広告収入	2,489,500	3,037,500	△ 548,000
参加費収入	7,353,500	8,820,500	△ 1,467,000
書籍販売収入	2,950,000	2,423,341	526,659
雑収入	350,000	309,000	41,000
事業収入計	13,143,000	14,590,341	△ 1,447,341
⑤寄付金収入			
寄付金収入	2,000,000	1,950,000	50,000
⑥雑収入			
受取利息収入	5,000	1,692	3,308
広告収入	350,000	390,000	△ 40,000
雑収入	0	450	△ 450
雑収入計	355,000	392,142	△ 37,142
事業活動収入計	38,548,000	39,226,529	△ 678,529
2. 事業活動支出			
①事業費支出			
印刷製本支出	4,868,000	4,692,451	175,549
給料手当支出	1,590,000	1,657,215	△ 67,215
臨時雇賃金支出	1,789,000	1,311,125	477,875
賞与支出	210,000	210,006	△ 6
旅費交通費支出	4,798,300	3,752,917	1,045,383
通信運搬費支出	2,158,200	2,222,000	△ 63,800
消耗什器備品費支出	714,700	1,776,263	△ 1,061,563
会議費支出	4,227,200	4,062,300	164,900
諸謝金支出	1,627,700	1,393,291	234,409
負担金支出	145,000	154,195	△ 9,195
図書研究費支出	1,020,000	1,046,522	△ 26,522
事業費支出計	23,148,100	22,278,285	869,815
②管理費支出			
給料手当支出	4,678,333	5,007,893	△ 329,560
賞与支出	730,467	730,471	△ 4
臨時雇賃金	20,000	7,650	12,350
法定福利費支出	550,000	629,907	△ 79,907
会議費支出	313,400	239,139	74,261
旅費交通費支出	3,165,000	2,327,274	837,726
通信運搬費支出	1,484,900	1,107,895	377,005
消耗什器備品費支出	871,900	445,298	426,602
修繕費支出	20,000	0	20,000
印刷製本費支出	969,000	898,680	70,320
支払手数料支出	1,330,000	1,384,575	△ 54,575
光熱水料費支出	186,000	180,266	5,734
賃借料支出	2,450,700	2,450,700	0
諸謝金支出	100,000	131,440	△ 31,440
租税公課支出	4,000	0	4,000
負担金支出	60,000	60,000	0
図書研究費支出	30,000	8,200	21,800
雑支出	160,000	135,395	24,605
管理費支出計	17,123,700	15,744,783	1,378,917
③その他の支出			
その他の支出	600	0	600
法人税、住民税及び事業税	100,000	70,000	30,000
その他の支出計	100,600	70,000	30,600
事業活動支出計	40,372,400	38,093,068	2,279,332
事業活動収支差額	△ 1,824,400	1,133,461	△ 2,957,861
II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入			
投資活動収入計	0	0	0
2. 投資活動支出			
①その他の支出			
退職給付引当資産取得支出	156,000	156,000	0
投資活動支出計	156,000	156,000	0
投資活動収支差額	△ 156,000	△ 156,000	0
III 財務活動収支の部			
1. 財務活動収入			
財務活動収入計	0	0	0
2. 財務活動支出			
財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
IV 予備費支出			
当期収支差額	△ 1,980,400	977,461	△ 2,957,861
前期繰越収支差額	4,402,205	7,736,865	△ 3,334,660
前期繰越収支差額調整額	0	834,685	△ 834,685
次期繰越収支差額	2,421,805	9,549,011	△ 7,127,206

財 産 目 録

平成26年3月31日現在

(単位：円)

貸 借 対 照 表 科 目		場 所 ・ 物 量 等	使 用 目 的 等	金 額
(流動資産)				
	現金			155,196
	普通預金			9,338,553
	定期預金			834,685
	たな卸資産			1,039,410
流動資産合計				11,367,844
(固定資産)				
基本財産				
	定期預金			20,000,000
その他固定資産				
	什器備品			2
	敷金			963,900
固定資産合計				20,963,902
資産合計				32,331,746
(流動負債)				
	未払費用			675,587
	未払法人税等			70,000
	預り金			33,836
流動負債合計				779,423
固定負債合計				0
負債合計				779,423
正味財産				31,552,323

監事監査報告書

一般社団法人大学英語教育学会
会長（代表理事） 神保 尚武 殿

私たち監事は、一般社団法人大学英語教育学会の平成 25 年 4 月 1 日から平成 26 年 3 月 31 日までの業務に関して、監査を実施しました。その結果について、次のとおり報告いたします。

1. 監査の概要

私たち監事は理事会に出席するほか、理事および法人の関係者から事業の執行状況について聴取し、業務について監査を実施しました。

また、当該事業年度に係る貸借対照表ならび正味財産増減計算書、およびその附属明細書について監査を実施しました。

2. 監査の結果

(1) 業務監査の結果

法人の業務について、法令、定款および規則等に従い、適正に運営されているものと認めます。


(2) 会計監査の結果

貸借対照表ならび正味財産増減計算書、およびその附属明細書は、法人の財産および損益の状況を正しく示しているものと認めます。


平成 26 年 5 月 19 日

一般社団法人 大学英語教育学会

監 事

見上 晃 

監 事

駒田 誠 

多読指導から学んだこと：100万語読破の学生から

千葉 克裕（文教大学）

「最もJACETらしくない発表」という嬉しいコメントを、第53回JACET国際大会（広島）で頂いたのがこの原稿を書くきっかけである。発表内容は「多読学習の成功者から考える多読指導のあり方—なぜ彼らは読み続けることができたのか?—」というものであった。発表では多読指導の内容を紹介したが、実は教師として教えられたことの方が多かった。本稿では、多読指導を通して得られた学びを紹介する。

文教大学国際学部では、7年前から英語教職課程を設置し教員養成を始めた。履修者の英語力養成の一環として「リーディングクラブ」の指導を手伝い始めたのは今年の春であった。数年前から行われており、毎週火曜日の放課後に1時間、英字新聞の切り抜きやインターネットのニュース記事を10数編用意し、学生たちは気に入ったものを読み、最後の10分程度は教員から英語で質問し、それに答えるという形で進められていた。1ヶ月ほど様子を見て感じたことは、学生たちは1週間のその時間だけ、与えられたものしか読まないということである。採用試験に通用するような英語力をつけるには不十分と感じたことが、多読指導を始めるきっかけであった。

高校教員の時代から、いわゆる Graded Readers が英語力養成に良いことは知っていたし、薦めてもきた。しかし、実際に多読指導をしたことは無かったのである。そこで、かつての同僚であり経験豊富な梅光学院大学の金井典子先生に教えを仰ぎ、「記録シート」と「語数を調べるサイト：SSS 書評検索システム」を教えて頂いて、「多読3原則」を加えた3つの道具だけで初めての多読指導をスタートした。

学部時代も含めて英語学習に力を注いだ自信はあるが、「多読」をしたことはない。100万語で人生が変わるといような話も聞いていたが、それがどれほどの量か正直なところ全く想像もついていなかったのである。

リーディングクラブでの指導に加え、ゼミの学生や研究室に出入りする学生にも多読を薦め始めた。最初に学生たち伝えたのは、「まず20万語を目指そう」であった。学生たちは「え～、そんなの無理」という反応であったが、正直に告白すると、言っている自分自身が20万語など行かないだろうと内心思っていたのである。実際、多くの学生は多読を始めてはみたものの、ほとんど続いていなかったのである。ここで、おもしろいことに気づいた。いわゆる英語の出来る学生たちが続かないのである。受験勉強の影響か、「Starter」や「レベル1」といった簡単なものでは物足りなく感じ、すぐにレベル4などに手を出す。そして、難しいから中断し、そのまま止めてしまうのである。ある学生の言葉。「僕は趣味でちゃんとした本（ペーパーバック）を読んでいますから（別に多読は必要ありません）」と言うのである。その実、半年経っても30ページも進まないのであった。

そんな中、20万語に到達した学生が2人出た。いずれも際だって優秀な学生ではなく、教職課程も履修していない、さらにリーディングクラブにも顔を出さない学生であった。うれしげに報告に来たとき、私は素直に驚嘆し、褒め称えた。自分も読んだことがない量を読んだことに感動したのである。また、自分の指導に素直に従ってくれたことも喜びであった。その日は焼き肉屋でお祝いをしたことをよく覚えている。

およそひと月後、またもやその2人が研究室にやってきて、「先生、40万語行ったので飯行きましょう！」と言うのである。前の20万から期間が短く、「本当に読んだのか?」と尋ねるとなんと「実は何回か合宿したんです」との答え。一人暮らしのアパートに泊まり込みで一晩に2～3万語読むというのを何回かしたとのことであった。その夜、2回目の焼き肉になったのは言うまでもない。

冬を迎え、順調に語数を伸ばしつつに50万語

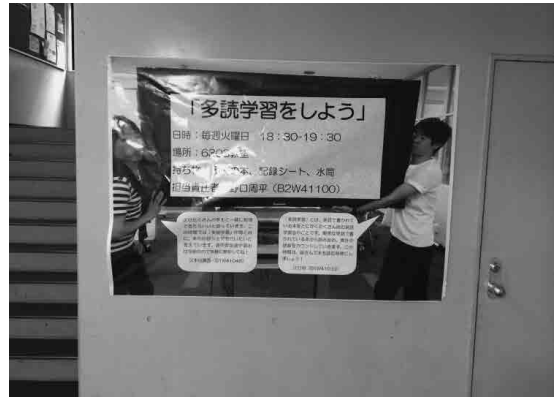
を突破した。TOEICの点数も順調に伸び、多読指導は素人でも英語教師としてこれがただ事ではないことは直感で分かった。これは伝える価値があると思い、JACET第53回国際大会（広島）での実践報告に応募し、幸いに発表の機会を得ることになった。彼らにこのことを伝えると、予想外の喜びを見せた。自分たちの取り組みが、大学の英語の先生たちに紹介されるということなどは夢だにしかかったのであろう。このとき、「このペースで行けば、8月の終わりまでには100万語行くんじゃないか？」と励ましたことが、彼らをさらに動機づけることになったようである。

20万語に達した頃に彼らに指示したことがもう一つあった。それは記録簿以外に10万語毎にリフレクションを書くことである。日々の学習記録をつけるノートを用意するように指示し、1人はほぼ毎日休まずにジャーナルを書き、もう1人は総学習時間を記録する用紙を渡したところ見事に記録を続けた。200時間でTOEICが100点アップしたときには、かつて東京海洋大学の水島先生の発表で「TOEICを100点上げるのにおよそ200時間の学習が必要」と伺ったことが鮮やかによみがえった。英語指導において他人の研究データではなく、実体験として伝えられることが増えたことは、教師として貴重な財産となった。

100万語の学習を振り返った記録を精査すると、30万語が1つの山場であることが分かる。10万語では変化を見せなかったテストスコアも30万語で大きく上昇する。また40万語から50万語になると学習習慣も確立し、この頃の記録には「習慣になり読まないと落ち着かない」というものや「1万語程度の本は長いと感じなくなった」、「日本語の本を読んでいるのと同じ感覚で読んでいる」などの記述が現れる。学習の継続とテストスコアの2つの成功体験により自己肯定感が著しく増したことも確認された。

英語学習以外への波及効果も著しく、あらゆることに前向きに取り組むようになった。就活において両名とも4月早々に内定を得ていたのも印象深い。採用面接において、「自分が積み重ねてきたことを自信を持って話すことが出来た」、というのは共通したコメントである。

前述したJACET国際大会での発表は、多くの先生方に関心を持って頂き、主催者側の配慮で急遽教室を変更して発表させて頂いたが、それでも立



ち見がでるほどの盛況であった。自分の中では、ささやかな実践報告のつもりであったが、あれほどたくさんの方が来てくださったことに驚きと緊張を隠せなかった。それだけ多くの大学で多読指導が行われ、またそれだけ多くの学生が思うように続けられない実態があることを実感した。

今回、100万語達成の学生からは本当に多くのことを学んだ。まず第1に、「継続は力なり」という言葉が真実であることである。教師として20年以上生徒・学生と向き合うなかで幾度その言葉を口にしたであろうか。自分の体験から伝えられることもあったが、彼らの積み重ねと成長を見た今、私は心の底からこの言葉の意味を学生に伝えられるようになった。

第2に、「信頼関係の大切さ」である。多くの学生に同じことを指導したが、この2人だけが続いた理由はなぜか？その答えは日頃の指導による信頼関係以外のなものでもない。彼らは、私の指導する一つ一つを信じて忠実に従ったのである。その結果としての100万語読破という成果を見たとき、学生の信頼に足る人格を維持することが教師としていかに大切なことかを改めて肝に銘じた。

第3は、努力を積み重ね、自分を認めることができたとき、人は必ず成長するという「教育の真髄」である。彼らはそれぞれTOEIC380点から635点、450点から775点と英語力の大きな上昇を見せた。しかし、ただひたすら易しい英語の本を読み続けるという学習の中で彼らが見せたのは、テストスコア以上の、言葉にできない「人格の成長」である。しかも彼らは自分の成長だけでは満足しなかった。この4月、彼らは勝手にA0ノビサイズの大きなポスターを作り、「多読学習サークル」を立ち上げた。自分たちが得たものを

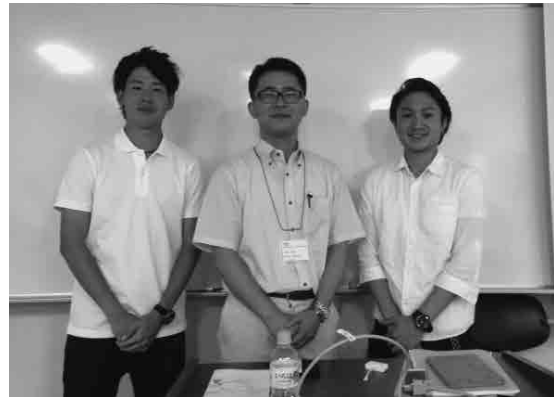
後輩にも伝えたい、また千葉へのささやかな恩返しをしたいというのが動機だとのことである。昨年まで教員主導で、時には学生が誰もいない日があったリーディングクラブが、教員のいない自律学習の場に生まれ変わったその姿を見ることは、正に教師冥利に尽きる。

簡単な英語の本を楽しんで読む、ただそれだけの「多読」がもたらしたものは、学習者の英語力と人格の成長だけではなく、なによりも教師の成長であった。

100万語達成学生のコメント

国際学部4年 江口裕君

大学3年が始まる4月、千葉先生から薦められた多読学習ですが、今となって振り返ってみると、私の人生を変えたといっても過言ではありません。100万語を達成した時、これだけ継続して学習することができたことへの満足感でいっぱいでした。しかし、それと同時に何かを成し遂げるとはとても困難なもので、そこには人の何倍もの努力と苦労が必要なのだという事も学びました。多読によって変わった人生を懸命に歩いていくことが先生への恩返しだと思っています。



国際学部4年 久木山真吾君

多読を始めた当初は、100万語いくことを想像もしていませんでした。しかし、100万語達成した今は、やり遂げたことに誇りを感じています。また、一つのことをやり遂げたという経験ができたことも大きな自信になりました。それと同時に、ここで終わりではなく、また次のステップが始まるのだという意識も芽生えました。私は何よりも、多読学習を教え、支えてくれた先生と切磋琢磨して一緒に読み続ける仲間に出会えたことに心から感謝しています。

特別委員会報告

現在、JACETには基本語改訂、第4次ICT調査研究、グローバル人材育成の3つの特別委員会が設置されています。このうち、本号では、基本語改訂特別委員会とグローバル人材育成特別委員会の中間報告を掲載します。また、今年3月末で2年間の活動を終えたEBP調査研究特別委員会の最終報告も掲載します。(編集委員会)

◆基本語改訂特別委員会報告

基本語改訂特別委員会は、平成25年度から3年間で『大学英語教育学会基本語リストJACET 8000』(通称JACET8000)を改訂することを目的に設立されました。基本語改訂特別委員会は、現実の英語使用の実態と日本の英語教育の実態を融合させる教育語彙表を作成すべく、議論を重ねています。

平成25年度は3回の委員会を開催し、基本語改訂の基本方針、新規委員の募集、その審査などを行いました。基本語改訂の基本方針としては、日本人英語学習者が使用する英語を目標として、それに到達するための英語語彙表の編纂として、大学英語教育学会国際大会京都大会で提案しました。それは、BNCとCOCAそれぞれで、会話、小説、雑誌、ニュース記事、学術論文の5ジャンルに共通する語を抽出し、約1万語のベースリストとします。このベースリストに、いくつかの指標による順位の補正を行い、日本の大学生が学習するに値する語彙表を作成しようというものです。具体的には、中・高英語教科書、大学入試センター試験、日本の英字新聞、日本人が執筆した英語の学術論文という5種のコーパスで頻出する語をベースリストの上位へ引き上げて補正するというもの

です。平成25年度は、この基本語改訂1次案について委員会で検討しました。

新規委員の募集は、基本語改訂の作業として改訂語彙表の検証と付加リストの作成を挙げ、いずれの作業を希望するか、さらにその方法についての提案を平成25年11月末日までに応募の条件としました。4名の応募があり、第3回の基本語改訂特別委員会で承認されました。

平成26年度第1回基本語改訂特別委員会では、基本語改訂1次案についての意見交換を行いました。その結果、レマ化に問題があり中学レベルで使われている基本的な語が抜けていること、大学教員からみて大学生には難しすぎるとされる語が比較的上位に位置していることなどの意見が出されました。これに対して、レマ化の問題およびベースリストの補正については正副委員長で対策を講じることが了承されました。

また付加リストについては、中学・高校レベルの語彙表、さまざまな学術分野に共通する語彙表、英語を産出的に使用する際に多用される発表語彙表の作成が提案され、それぞれ担当が決まり、作業を進めています。

平成26年度第2回基本語改訂特別委員会では、正副委員長が改訂したレマ表に基づき、大学入試センター試験、日本の英字新聞、日本人執筆の英語学術論文による補正を行った基本語改訂2次案を提案しました。しかしながら、これも大学生には難しすぎる語が上位にある、逆に早い段階で身につけておくべき語が下位にあるという異論が出されました。これを受けて、基本語改訂特別委員会は、英語使用の事実(頻度)に基づき、かつ英語教師として大学生に知ってほしい語という直観に合った語彙を選定する方法を模索している最中です。

平成26年度中に改訂基本方針を決定し、平成27年度に基本語改訂3次案を提案し、最終案を決定、さらにそれを検証する予定です。このような作業を経て、大学英語教育学会新基本語を平成27年度内に刊行する予定です。

(文責:望月正道、基本語改訂特別委員会委員長(麗澤大学))

◆グローバル人材育成特別委員会 はじめに

大学英語教育学会は、2013年8月の京都大学

での大学英語教育学会第52回(2013年度)国際大会において、JACET、外国語教育メディア学会(LET)、全国英語教育学会(JASELE)の3学会による「教育再生実行会議で提案された大学入試制度(英語)の改革案についての意見書/アピール(通称「京都アピール」)を皆様にお見せし、文部科学省高等教育局入試課に提出いたしました。その後、JACETは、2014年5月25日の理事会で承認された「教育再生実行本部からの『成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言』に対する意見書」というJACET独自の提案を同省同局大学振興課に提出いたしました。その提案の中の一部が、2014年3月の理事会で審議承認され、研究促進委員会主導のもと、グローバル人材育成特別委員会が結成され、4月からその提案の2つが2年計画の「グローバル人材育成特別研究」として実施されております。その分析結果を2015年末には中間報告書として、2016年末には最終報告書としてまとめ、提言を行う予定です。

JACET 国際大会での活動経緯

先述の京都大学での国際大会において、特別企画としてグローバルポスター第1弾「グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み」を募集したところ88件の発表があり、その報告書を文部科学省高等教育局大学振興課に提出いたしました。今年度の国際大会でも、特別企画「グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み」の第二弾として、グローバル・ポスターセッションでは2つの分野(「到達目標とその評価」および「留学生派遣プログラム」)で46件の大学・学部等の特徴ある英語教育の取り組みが紹介されました。また、大会最終日の特別シンポジウムでは、「大学英語教育における『教育の質保証』と『外部試験』導入の関係性」について、尾関直子研究促進委員会副委員長(明治大学)の司会のもと、西川美香子日本英語検定協会教育事業部国際課アドバイザー、安藤益代国際ビジネスコミュニケーション協会事業本部長、根本斉国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部TOEFL事業部部長がパネリストとして登壇され、活発な論議がなされました。また、大会時には、後述しますように本特別委員会の研究状況をポスターとして報告しました。

なお、2015年8月29日(土)から8月31日(月)

の日程で、大学英語教育学会第54回（2015年度）国際大会が鹿児島大学郡元キャンパスで、「グローバル時代の異文化間コミュニケーション能力と英語教育」というテーマで開催されることになっています。このテーマが示すように、来年度を「グローバル人材育成特別企画」の最終年度と位置づけ、本学会としての指針を打ち出していくことになっています。

「教育再生実行本部からの『成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言』に対する意見書」とグローバル人材育成特別委員会の目的とその活動状況

提案1 4技能を測る外部検定試験を一般入試以外の入試である海外就学者試験やイングリッシュ・トラックなどの入学試験に積極的に活用する。

「外部試験大学実態調査班」

「外部試験大学実態調査班」では、各大学・大学院における外部試験をどのように使用しているかを調査します。2014年度内にJACET会員に対して、アンケート調査を行い、その結果を分析することになっています。入学試験だけではなく、留学のための試験、あるいは卒業のための試験となっているかなどの実情が明らかになることが期待されます。

「外部試験調査班」

「外部試験調査班」は、以下のJACETの賛助団体等に対して調査を実施します。その第1弾として、各組織が試験というものに対してどのような意識を持っているかについてのアンケート調査を行い、国際大会時にポスター発表しました。その結果と分析を2015年3月に刊行される報告書で発表します。さらに、各試験の内容をJACET独自の視点から分析し、外部試験を日本の大学・大学院で的確に使用するべきかの提言を行います。（調査協力団体）TSST（（Telephone Standard Speaking Test）アルク/アルク教育社）、英語コミュニケーションテストOPIc（NECマネジメントパートナー）、CASEC（（Computerized Assessment System for English Communication）教育測定研究所（JIME））、TOEFL iBT（米国ETS）、TOEIC Test; TOEIC Test; Speaking and Writing Tests; TOEIC Bridge Test（国際ビジネスコミュニケー

ション協会（IIBC））、G-TELP（（General Tests of English Language Proficiency）G-TELP日本事務局）、BULATS（（The Business Language Testing Service）日本英語検定協会）、IELTS（日本英語検定協会）、実用英語検定試験（日本英語検定協会）、VERSANT™（ピアソン・ジャパン株式会社）、VELC Test（（Visualizing English language Competency Test）VELC研究会事務局（金星堂内））、GTEC（（Global Test of English Communication）ベネッセ・コーポレーション）、ACE（（Assessment of Communicative English）英語運用能力評価協会）、TEP（早大ーミシガン大テクニカル・ライティング検定試験（東京外国語センター））（順不同）

提案2 大学は、大学卒業時における学生の英語到達度の目安として、学部・学科の専門性に応じた外部試験などを活用し、学生の質の保証をすることに責任を持つ。

「到達目標実態調査班」

「到達目標実態調査班」は、大学卒業時における学生の英語到達度の規準を設定し、その質保証のための実施プランを提示します。各大学もしくは各学部や学科が、それぞれの学生の専門分野に応じ、卒業時における学生の英語の到達度をTOEFL iBTやIELTSなどの4技能を測る外部英語検定試験の数値、CEFRのレベルでの設定や、ESP（English for Specific Purposes：特定の目的のための英語）に関する外部検定試験などを活用することを推奨することになります。その第一弾として、各大学で行われている「到達目標とその評価」に焦点を絞った取組を公募し、第53回国際大会（2014年度）においてポスターセッションで発表していただきました。さらに、専門分野別（薬学；工学；観光学；ビジネス等を対象）の到達目標を提示している既存のシラバスや教材を収集し、それが専門分野別の大学の到達目標とその評価、さらにはCEFR等のレベル設定を行っているかを調査していきます。これらの調査結果は2015年3月の報告書で提示される予定です。

以下の提案は、準備が出来次第、2015年度以降に順次実施していくこととなります。

提案3 国が4技能を測ることが出来る大学入試問題を作成・実施する。

(実行のための具体策(案))

- ・それぞれの学会の役割を明確にした形での試験作成のモデルの提示
- ・学会連携プロジェクトの実施

提案4 国は「高等教育局外国語教育政策室(仮称)」というような専門機関を設置し、我が国の言語政策を進める。

(実行のための具体策(案))

- ・現状調査の実施

提案5 国が、小一中一高一大大まで、一貫した英語の「ナショナルシラバス」を開発する。

(実行のための具体策(案))

- ・検定教科書の検証

(文責：寺内一、研究促進委員会担当理事・グローバル人材育成特別委員会担当理事(高千穂大学))

◆EBP 調査研究特別委員会

EBP (English for Business Purposes) 調査研究特別委員会は、企業の国際部門責任者が社員に期待する英語コミュニケーション能力に関する調査を目的として、2012年4月1日～2014年3月31日の2年間、一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会(以下、IIBC)との共同研究を実施した。

本特別委員会は、JACET副会長の寺内一(担当理事・高千穂大学)、ESP北海道の内藤永(委員長・北海学園大学)、ESP関東の藤田玲子(東海大学)、ESP関西の照井雅子(近畿大学)、ESP九州・沖縄の荒木瑞夫(宮崎大学)をメンバーとして、研究を進めた。

本研究の源泉となった『企業が求める英語力(小池(監)・寺内(編)2010)』では、ビジネスパー

ソンが自身の英語力の不足を実感しており、交渉を要する場面では特にその傾向が強いことが示された。そこで、今回の研究では、交渉と議論の舞台となる「ビジネスミーティング」において、ビジネスパーソンが具体的にどのような困難を感じているかをテーマに据えた。

研究では、二種類の調査を実施したが、アンケート調査では、国際業務に携わり、管理職に就くビジネスパーソン909名から、インタビュー調査では、調査協力を得た12名からそれぞれ回答をいただき、その結果を分析した。実際の調査の際には、全国のESP研究会のメンバーの強力なサポートを得て、アンケート調査に関しては第3次までの予備調査を重ねた上でアンケート票を完成させた。

調査の途中では、JACET内外の研究会や学術集会において、積極的に発表することで、ESP関係者だけでなく、様々な分野の専門家からの貴重な意見を頂戴し、それを反映する中で進めて行った。2012年には、JACET北海道支部の支部大会(札幌)、JACET関東支部の支部大会(東京)、2013年には、JACET・ESP関東の研究会(東京)、LSPの国際大会(オーストリア・ウィーン)、JACETの国際大会(京都)、JACET関西支部の支部講演会(大阪)、ALAKの国際大会(韓国・釜山)、TEFLの国際大会(フィリピン・マニラ)、2014年には、ELFの国際ワークショップ(東京)、JACETの国際大会(広島)、EFLの国際大会(ギリシャ・アテネ)にそれぞれ参加し、本研究の各段階での調査内容を提示していった。

各調査の前後には、本委員会とIIBCのメンバーは、北海道、東京、大阪、京都で会議を重ね、様々



(2014年3月の共同研究打ち上げより)



(2013年7月LSP(ウィーン)より)

な角度からの議論を慎重に進めて行った。研究会や学術集會に出席する際の打ち合わせ等も含めると、メンバーが共に過ごした時間は非常に長く、濃密なものであった。各地の美味しい食事を堪能し、マイラーのように移動を重ね、一つ一つは思いつき深いものとなった。

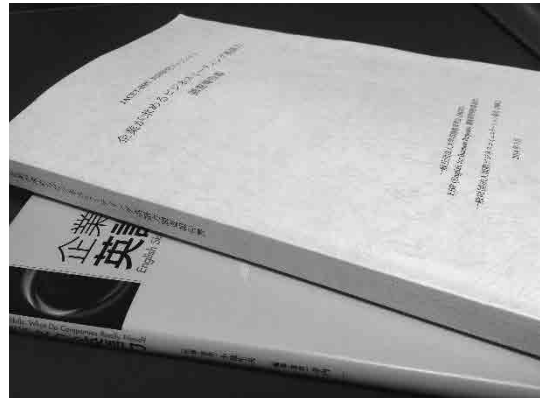
調査結果は多岐に渡るが、ポイントのみをかいつまんで紹介する。まず、会議のレベルをCEFRで評価すると、現状では、3割が基礎段階の使用者レベル、3割がB1レベル、すなわち、自立した使用者レベルのスタートにある。周到な準備をして臨む限り、流れに沿った会議はこなすことができるが、議論を深めること、準備のない内容に立ち入ることは難しいというのが現状である。B2.2レベル、すなわち、活発な議論を展開する、説得力のある見解の提示や対応が、企業が求めている目標レベルだが、まだまだ、ギャップがあるのが今の状況である。

会議の中で最も困難を感じているのは、速いスピードや様々な発音のリスニング、微妙なニュアンスや細部の説明を理解すること、また伝達をすることである。聞き取りの段階での困難が指摘されている点は興味深い。グローバル化の影響で、様々な人種や言語的背景を持った人が参加する場面が増えたことがその背景にあるようだ。

英語による会議の場合、ネイティブスピーカーよりも、ESLあるいはEFLスピーカーの割合が増えてきていることが上げられる。たとえば、社内会議の比率は、日本人が5割、ネイティブスピーカーが2割、ノンネイティブスピーカーが3割となる。

このような様々な英語が飛び交う中で行われる会議において、困難を感じているのは、具体的には、コミュニケーションのパターン、価値観、商習慣、法的背景、会議の手法などの「違い」が指摘されている。一方、会議を円滑に進めている企業は、その「違い」を乗り越えた、会議に関するジャンル、プラクティスが存在し、それに沿う形で会議を運営している。

興味深い発見としては、ジュニアからスタートするキャリアの中で、シニア、マネージャークラスへとキャリアアップするに連れて、求められているスキルが異なっている点である。ジュニアの段階では、会議の準備や会議の内容の正確な理解が求められ、シニアの段階では、会議をファシリ



(2014年3月刊行の報告書)

テートする力、特定の方向に議論を持っていく力、マネジメントの段階では、会議以前の人間関係構築である。

会議と言っても、目的、参加者、立場によって、その見方は多種多様となる。ビジネスパーソンは、英語力というよりも、人間力が問われる、と表現しがちだが、本研究の分析によれば、CEFRによる評価が高いほど、会議の困難度は下がるという程度のある相関を見ることができた。さらに、研究を重ねて行きたいとの展望が得られる2年間であった。

調査の詳しい内容については、『JACET-IIBC 共同研究プロジェクト 企業が求めるビジネスミートング英語力 調査報告書』(2014年3月)としてまとめた。是非、ご高覧の上、JACET会員の皆様から幅広くご意見を頂戴できれば幸いである。

(文責：内藤 永、EBP 調査研究特別委員会委員長 (北海学園大学))

支部だより

〈九州・沖縄支部〉

1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 支部大会

① 2014年度九州沖縄支部大会

日時：2014年7月5日(土) 10:00～17:30

会場：鹿児島大学教育学部

大会テーマ：「Active Learningに向けた大学英語教育—協同学習と自律学習を視野に入れたカリキュラム構築」

(2) 研究会

①第144回東アジア英語教育研究会

日時：7月19日(土) 15:30～17:30

会場：西南学院大学1号館205教室

シンポジウム：「アジア圏学習者研究の新展開：多元化と相対化」

発表者：石川慎一郎、川村晃市、緒方高士、張琪、曹卓琦(神戸大)

②第145回東アジア英語教育研究会

日時：9月20日(土) 15:30～17:30

会場：西南学院大学

研究発表：「テスト項目数の違いがC-Testの心理測定学的特性に与える影響」

発表者：伊藤彰浩(西南学院大)

③第146回東アジア英語教育研究会

日時：10月18日(土) 15:30～17:30

会場：西南学院大学

研究発表：「消滅危機言語についての指導—アイヌ語を中心に—」

発表者：水島孝司(南九州短大)

④第147回東アジア英語教育研究会

日時：11月15日(土) 15:30～17:30

会場：西南学院大学

発表者(予定)：金森強(関東学院大)

⑤第148回東アジア英語教育研究会

日時：12月13日(土) 15:30～17:30

会場：西南学院大学

発表者(予定)：田地野彰・金丸敏幸(京大)

1) 2014年度九州・沖縄支部研究大会について

②2014年度第1回支部紀要編集委員会

日時：6月21日(土) 14:00～16:00

会場：西南学院大学

議題：

1) 2014年度九州・沖縄支部紀要編集について

③2014年度第2回支部紀要編集委員会

日時：7月19日(土) 14:00～16:00

会場：西南学院大学

議題：

1) 2014年度九州・沖縄支部紀要編集について

④2014年度第3回支部紀要編集委員会(メール審議)

日時：8月23日(土)

議題：

1) 2014年度九州・沖縄支部紀要編集について

⑤2014年度第4回支部紀要編集委員会

日時：10月18日(土) 11:00～13:00

会場：西南学院大学

議題：

1) 2014年度九州・沖縄支部紀要編集について

⑥2014年度第4回役員会

日時：10月18日(土) 14:00～16:00

会場：西南学院大学

議題：

1) 2014年度九州・沖縄支部研究大会の反省について

2) 2015年度国際大会(鹿児島大学)の準備について

3) 2014年度九州・沖縄支部紀要編集について

(伊藤健一・北九州市立大学)

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

日時：2013年7月5日(土) 10:00～17:30

会場：鹿児島大学

議題：

1) 2013年度活動報告について

2) 2014年度活動計画について

(2) 支部役員会

①2014年度第3回役員会

日時：7月5日(金) 18:00～20:00

会場：JRホテル鹿児島会議室

議題：

〈中国・四国支部〉

1. 支部研究会等の開催

(1) 支部春季研究大会

日時：2014年6月7日(土) 14:30～17:30

場所：広島市立大学

研究発表

○第1室

1) 「協同学習を取り入れた内容理解重視の授業—そのリメディアル教育としての可能性—」岩中貴裕(香川大)

- 2) 「ティーチング・ポートフォリオの作成を通して英語教育活動を振り返る」中山晃（愛媛大）
- 3) “Introducing a New Scale: Student Preferences for Instructional Language (SPIL)” Eleanor Carson（広島市立大）
- 4) 「小グループ内で実施するピア・アセスメント—その利点と問題点—」奥田利栄子（広島大）
- 5) 「スイスにおける外国語教育政策—多言語教育、CLIL、外国語教員養成の視点より—」二五義博（海上保安大学校）

○第2室

- 1) 「英語学習における嫌悪感と価値、困難度、防衛的反応の関係」藤居真路（広島県立尾道商業高校）
- 2) 「L1多義指導はL2誤出力予防につながるのか？多義指導の有効性についての予備調査」西谷工平・小田希望（就実大）
- 3) 「英語が苦手な学習者の内発的動機づけと学習への取り組みを高める授業の効果：実践研究による予備的検討」田中博晃（広島国際大）
- 4) 「リスニングにおける文法性判断力」藤村美希（安田女子大・院）
- 5) 「Moodle小テスト機能の活用について」松岡博信（安田女子大）

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

日時：2014年6月7日（土）14:00～14:30
場所：広島市立大学
議題：

- 1) 平成25年度支部活動報告
- 2) 平成25年度支部会計報告
- 3) 平成26年度支部活動計画
- 4) 平成26年度支部会計予算
- 5) 社員選挙について
- 6) 第53回国際大会について

(2) 支部役員会

①第1回役員会

日時：2014年6月7日（土）10:30～12:30
場所：広島市立大学
議題：

- 1) 支部役員の改選について
- 2) 社員選挙について
- 3) その他

4) 第53回国際大会について

②第2回役員会

日時：2014年8月28日（木）
場所：広島市立大学
議題：

- 1) 2015年度の活動計画
- 2) 次期支部長について

3. その他

(1) 第6回Oral Presentation & Performance (OPP) 研究会

実施日：2014年12月14日（日）（予定）
場所：安田女子大学

(2) 支部ニューズレターの発行

『大学英語教育学会中国・四国支部ニューズレター』

第13号 発行日：2014年7月30日

第14号 発行日：2015年1月20日（予定）

（鳥越秀知・香川高等専門学校）

〈関西支部〉

1. 支部大会、支部講演会等の開催

(1) 支部大会

①支部春季大会

日時：2014年6月14日（土）10:00～18:00
場所：大阪薬科大学

企画ワークショップ：

「英語教員のための字幕翻訳入門—語学教育における翻訳」講演者：染谷泰正（関西大）

スペシャル・トーク：

「英文和訳再考：『英文解釈演習室』の現場から」講演者：筒井正明（明治学院大・名誉教授）

招待講演：

「朱牟田夏雄の英語教育論とJACETの原点：『教養』英語再考」講演者：斎藤兆史（東京大）

②支部秋季大会（予定）

日時：2014年11月29日（土）10:00～18:00

場所：龍谷大学大宮学舎

企画シンポジウム（1）

「授業外施設・プログラムを用いた大学英語教育

改革」

コーディネーター：中西のりこ（神戸学院大）

講師：北爪佐知子（近畿大）、安田有紀子（神戸学院大）、Brent A. Jones（甲南大）

企画シンポジウム（2）

「英語リスニング研究最前線」

講師・コーディネーター：門田修平（関西学院大）

講師：佐久間康之（福島大）、菅井康祐（近畿大）、濱本陽子（関西大）

企画ワークショップ

「Praat入門」

講師：山本勝巳（流通科学大）

日時：2014年10月18日（土）

場所：同志社大学今出川キャンパス

③第3回役員会（予定）

日時：2015年3月7日（土）

場所：関西学院大学大阪梅田キャンパス

3. その他

(1) 支部ニューズレターの発行

1) JACET Kansai Newsletter No.69

発行日：2014年7月26日

2) JACET Kansai Newsletter No.70（予定）

発行日：2014年11月1日

(2) 支部講演会

(仁科恭徳・明治学院大学)

①第1回講演会

日時：2014年7月5日（土）15:30～17:00

場所：武庫川女子大学中央キャンパス

講師：南雅彦氏（サンフランシスコ州立大 / 国立国語研究所）

題目：テキストと談話：語り（ナラティブ）と語学学習の架け橋

②第2回講演会

日時：2014年10月18日（土）15:30～17:00

場所：同志社大学今出川キャンパス

講師：大谷泰照（大阪大・名誉教授）、橋内武（桃山学院大・名誉教授）、二五義博（海上保安大学校）、植松茂男（京都産業大）

題目：国際的にみた外国語教員の養成—日本の外国語教育を考えるために—（シンポジウム）

③第3回講演会（予定）

日時：2015年3月7日（土）15:00～17:00

場所：関西学院大学大阪梅田キャンパス

講師：教材開発研究会

題目：未定

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会（予定）

日時：2014年11月29日（土）

場所：龍谷大学大宮学舎

(2) 支部役員会

① 第1回役員会

日時：2014年7月5日（土）

場所：武庫川女子大学中央キャンパス

② 第2回役員会

〈中部支部〉

1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 支部大会

日時：2014年6月7日（土）10:00～17:00

場所：椋山女学園大学 星が丘キャンパス

大会テーマ：第二言語習得論からみた大学英語教育—量的アプローチと質的アプローチの共存—
University English Education Viewed in Terms of Second Language Acquisition: Integrating Quantitative and Qualitative Methods

特別講演

「第二言語指導効果研究と英語指導」村野井仁（東北学院大）

シンポジウム

テーマ：第二言語習得論からみた大学英語教育—量的アプローチと質的アプローチの共存—

1) 「第二言語ライティング能力の長期的発達：実証主義的アプローチと生態学的アプローチの接点」佐々木みゆき（名古屋市立大）

2) 「「客観性」を問い直し、量的研究の「客観主義」を乗り越える」柳瀬陽介（広島大）

3) 「L2 研究における共約可能性を求めて—研究の4条件からの眺め—」竹内理（関西大）

研究発表

1) “Research challenges in the investigation of communicative competence” Leah Gilner (Bunkyo Gakuin University)

2) “Alternative assessment and responsibility in

learning” James Higa (Nanzan Junior College (Part-time))

3) 「音読時におけるプロソディの使用：語強勢を焦点に」吉川りさ(名古屋大・院)

4) 「日本人のための英語ライティングセンター構築への提案—リテラシー支援に焦点を当てて—」佐藤雄大(名古屋外国語大)・木村友保(名古屋外国語大)

5) 「視覚的支援による英語文法教授法についての提案」高橋 薫(東京理科大)

6) 「語彙学習の方法と効果：訳語、類義語、定義による3法の比較を中心に」木下 徹(名古屋大)・梶浦真由美(名古屋大・院)・高 飛(名古屋大・院)

7) “Appropriate for the language classroom? Considering the use of a ‘contentious’ Internet video” Mark Rebuck (Meijo University)

8) 「大学生の「話せるようになりたい」に応える英語授業」永倉由里(常葉大短期大学部)

(2) 秋季定例研究会

日時：2014年10月11日(土) 14:00～17:30

場所：名城大学 名駅サテライト

講演

「大学英語教育が目指すべきもの」松本青也(愛知淑徳大名誉教授)

研究発表

“Strategies for Helping Poorly-Motivated Non-English Majors Remain Focused” Julyan Nutt (Tokai Gakuen University)

研究会発表(最新言語理論に基づく応用英語文法研究会)

「学習文法と科学文法のインターフェイス—英語感を涵養する言語理論研究の活用—」大森裕實(愛知県立大)・都築雅子(中京大)・今井隆夫(愛知教育大[非])

(3) 春季定例研究会(予定)

日時：2015年2月28日(土)

場所：名古屋工業大学

講演・研究発表(題目等未定)

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

①第1回

日時：2014年6月7日(土)

場所：椋山女学園大学 星が丘キャンパス

議題：

1) 2014(平成26)年度本部報告

2) 2013年度中部支部事業報告

3) 2013年度中部支部会計収支報告

4) 2014年度人事について

5) 2014年度中部支部事業計画について

6) 2014年度中部支部予算について

②第2回(予定)

日時：2014年12月6日(土)

場所：愛知大学 名古屋校舎

(2) 支部役員会

①第3回役員会

日時：2014年6月7日(土)

場所：椋山女学園大学 星が丘キャンパス

1) 2014(平成26)年度本部報告

2) 2014年度第1回中部支部総会報告事項について(確認)

3) 2014(平成26)年度秋季定例研究会

4) 本部事業「第2回英語教育セミナー」(中部支部担当)について

②第4回役員会

日時：2014年7月12日(土)

場所：名古屋工業大学

1) 2014(平成26)年度本部報告

2) 2014(平成26)年度中部支部大会報告

3) 本部事業「第2回英語教育セミナー」(中部支部担当)について

4) 支部事務局報告(中部支部予算執行状況ほか)

5) 中部支部秋季定例研究会(10月)について

6) JACET 社員選挙について

7) 中部支部長選挙について

③第5回役員会

日時：2014年10月11日

場所：名城大学 名駅サテライト

1) 2014(平成26)年度本部報告

2) 支部事務局報告(社員選挙、会計報告、支部紀要ほか)

3) 本部事業「第2回英語教育セミナー」(中部支部担当)について

4) 中部支部長選挙について

5) その他

④第6回役員会(予定)

日時：2014年11月29日(土)

場所：愛知大学 名古屋校舎

⑤第7回役員会（予定）

日時：2014年12月6日（土）

場所：愛知大学 名古屋校舎

⑥第8回役員会（予定）

日時：2015年1月10日（土）

場所：名古屋工業大学

⑦第9回役員会（予定）

日時：2015年2月14日（土）

場所：名古屋工業大学

3. その他

(1) 支部紀要の発行

『JACET中部支部紀要』12号

発行日：2014年12月20日（予定）

(2) 支部ニューズレターの発行

JACET-Chubu Newsletter No. 33

発行日：2014年12月20日（予定）

（下内 充・東海学院大学）

〈関東支部〉

1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 支部大会

日時：2014年6月29日（日）9:30～17:45

場所：青山学院大学青山キャンパス

大会テーマ：大学の国際化とグローバル人材育成
Globalization in Higher Education
and Human Resource Development

基調講演：

「Globalization in Higher Education and Human Resource Development」明石康（公益財団法人国際文化会館理事長・元国連事務次長）

全体シンポジウム

「大学の国際化とグローバル人材育成」大谷泰照（大阪大・名誉教授）、本名信行（青山学院大・名誉教授）、佐藤邦明（文部科学省高等教育局国際企画室国際企画専門官）

関東支部企画ワークショップ1「アカデミックライティングへのアプローチ：国際ジャーナルへ採択される方法」中谷安男（法政大）

関東支部企画ワークショップ2「TESL/TEFLにおける会話分析：事例紹介とワークショップ」武田礼子（青山学院大）

研究発表13件、実践報告12件、賛助会員発表3件

(2) 月例研究会

①第2回月例研究会

日時：2014年7月12日（土）16:00～17:20

場所：青山学院大学青山キャンパス

題目：「グローバルな英語コミュニケーション能力の到達基準を求めて—CEFR準拠のJS「ジャパン・スタンダード」の策定と実践—」川成美香（明海大）

②第3回月例研究会

日時：2014年11月8日（土）16:00～17:20

場所：早稲田大学早稲田キャンパス

題目：「日本人英語学習者が目指すべきスピーキング能力とは何か：発音・流暢さ・語彙・文法の観点から」齊藤一弥（早稲田大）

(3) 講演会（青山学院大学英語教育研究センター・JACET関東支部共催）

①2014年度第2回講演会

日時：2014年9月20日（土）16:00～17:30

場所：青山学院大学青山キャンパス

題目：「SLA研究最前線：英語教師に必要な第2言語習得論」佐野富士子（横浜国立大）

②2014年度第3回講演会

日時：2014年10月11日（土）16:00～17:30

場所：早稲田大学早稲田キャンパス

題目：「CALL研究最前線：クラウド環境の中で学ぶ反転授業とブレンド型の英語教育-Dominus illuminatio mea-」小張敬之（青山学院大）

③2014年度第4回講演会（予定）

日時：2014年12月13日（土）16:00～17:30

場所：青山学院大学青山キャンパス

題目：「第二言語習得研究からみた英語指導：インプット、インタラクション、アウトプット、フィードバックの観点から」

講師：酒井英樹（信州大）

※月例研究会・講演会の詳細は、支部会員MLにて配信及び関東支部HP上に掲載されます。

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

第1回支部総会

日時：2014年6月29日（土）

場所：青山学院大学青山キャンパス

議題：2013年度事業報告・会計報告、2014年度事業計画、社員選挙について

第2回支部総会

日時：2014年11月8日（土）

場所：青山学院大学青山キャンパス

議題：2015年度支部事業計画・予算について、2015年度支部人事について

(2) 支部役員会

①第3回支部運営会議

日時：2014年7月12日（土）14:45～15:45

場所：青山学院大学青山キャンパス

議題：

- 1) 支部大会の振り返り
- 2) 支部組織の改善及び各委員会の仕事の明確化について

②第4回支部運営会議

日時：2014年9月13日（土）14:00～15:30

場所：青山学院大学青山キャンパス

議題：

- 1) 紀要編集規定について
- 2) 支部組織の改善及び各委員会の仕事の明確化について

③第5回支部運営会議

日時：2014年10月11日（土）14:30～15:30

場所：青山学院大学青山キャンパス

議題：

- 1) 研究企画委員について
- 2) 支部大会について
- 3) 支部人事について
- 4) 支部HPの活用について

④2014年度支部運営会議（予定）

第6回11月8日（土）14:10～15:10（場所：早稲田大学）

第7回12月13日（土）14:30～15:30（場所：青山学院大学）

第8回1月10日（土）14:30～15:30（場所：青山学院大学）

3. その他

(1) 支部ニューズレターの発行

『JACET関東支部ニューズレター』第3号

発行日：2014年10月8日

（高木亜希子・青山学院大学）

〈東北支部〉

1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 支部大会

日時：2014年7月6日（日）14:40～16:45

場所：仙台市民会館

大会テーマ：大学英語教育の課題と展望

University English Language Education: Issues and Perspectives

シンポジウム：大学英語教育の課題と展望—東北4大学からの現状報告と提言—

コーディネーター：小嶋英夫（弘前大）

- 1) 「英語教育に関する2年間の実態調査と今後の課題」會澤まりえ（尚絅学院大）
- 2) 「教える人とアイデアを出す人（Those who give lessons and those who give some ideas）」富田かおる（山形大）
- 3) 「看護職者をめざす学生と英語学習」廣渡太郎（日本赤十字秋田看護大）
- 4) 「宮城教育大学の1年生と2年生の英語学習意識調査」高橋 潔（宮城教育大）

(2) 支部例会（予定）

日時：2014年11月30日（日）14:00～17:00

場所：仙台市民会館

研究発表：

- 1) 「英語教師の専門的成長と授業改善を支える協働的・省察的スーパービジョン—高校英語授業へのCLIL的アプローチ—」小嶋英夫（弘前大）
- 2) 「PBLを取り入れたビジネス英語の授業実践」佐藤夏子（東北工業大）
- 3) 「多読学習のリスニング力に対する効果：神経言語学的考察」千葉克裕（文教大）

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

日時：2014年7月6日（日）14:00～14:30

場所：仙台市民会館

議題：

- 1) 2013年度活動報告・支部会計報告
- 2) 2014年度活動計画・人事案

(2) 支部役員会

①第1回役員会

日時：2014年4月26日（土）12:00～14:30

場所：ホテルメトロポリタン仙台

議題：

- 1) 2013年度活動報告・支部会計報告
- 2) 2014年度活動計画・人事案（支部紀要・支部通信・支部大会など）

②第2回役員会

日時：2014年7月6日（日）12:00～13:50

場所：仙台市民会館

議題：

- 1) 2014年度活動計画・人事案（支部紀要・支部通信・支部大会など）
- 2) 社員選挙

③臨時役員会

日時：2014年10月18日（土）11:30～13:00

場所：ホテルメトロポリタン仙台

議題：

- 1) 2015年度人事案（社員選挙など）
- 2) 2014年度支部例会

④第3回役員会（予定）

日時：2014年11月30日（日）12:00～14:00

場所：仙台市民会館

議題：

- 1) 2014年度活動報告・支部会計報告
- 2) 2015年度活動計画・人事案（支部紀要・支部通信・支部大会など）

3. その他

(1) 支部紀要の発行

TOHOKU TEFL (JACET東北支部紀要) Vol. 5

発行日：2014年3月31日

(2) 支部ニュースレターの発行

1) 『JACET東北支部通信』No. 40

発行日：2014年3月31日

2) 『JACET東北支部通信』No. 41

発行日：2015年3月31日（予定）

（岡崎久美子・仙台高等専門学校）

〈北海道支部〉

1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 2014年度支部大会（第28回）大会

日時：2014年6月28日（土）

場所：北海道教育大学札幌校

研究発表：

1) “Interrogating the Current Push towards Monolingual EFL Education in Japanese Secondary Schools” Jeremie Bouchard (Hokkai Gakuen Univ.)

2) 「アクティブラーニング教室を利用したプロジェクト型英語教育について：エスノグラフィーを通してのローカルな視点の育成」中津川雅宜（北海道大・院）

3) “Assessing Instructional Events Using the MOLT and COLT Observation Schemes” Akinobu Shimura (Hokkaido Univ. of Education) Yoshiki Yokoyama (Hokkaido Univ. of Education) Aiko Sano (Hokkaido Bunkyo Univ.) Yuko Sakai (Hokkaido Sapporo Intercultural and Technological High School) Yasushi Kawai (Hokkaido Univ.)

4) “Developing Student Critical Thinking Skills through Public Forum Speeches” Yuko Sakai (Hokkaido Sapporo Intercultural and Technological High School) Sean Scarbrough (Hokkaido Sapporo Intercultural and Technological High School)

基調講演：

「グローバル人材育成に必要な異文化間コミュニケーション力」山内ひさ子（長崎県立大）

シンポジウム：

「英語リーディングフルエンシーを科学する」

1) 「文字処理レベルとリーディングフルエンシーの関連」川崎眞理子（関西学院大）

2) 「CELP-testによるリーディングの流暢さの測定」氏木道人（関西学院大）

3) 「ワーキングメモリ容量とリーディングの流暢さの関係について」中西弘（東北学院大）

4) 「シャドーイングはReading Fluencyの向上に効果がある？」門田修平（関西学院大）

5) 「ストラテジー、ビリーフ、動機づけからのReading Fluencyの向上」松本広幸（北海学園大）

(2) 研究会

① 2014年度第2回支部研究会

日時：2014年11月8日（土）13:00～18:00

（予定）

場所：札幌学院大学

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 2014年度支部総会

日時：2014年6月28日（土）

場所：北海道教育大学札幌校

議題：

1) 2013年度事業報告

2) 2014年度事業計画

(2) 2014年度支部役員会

① 2014年度第2回支部役員会

日時：2014年10月11日（土）13:00～15:00

（予定）

場所：北星学園大学

3. その他

(1) 2014年度支部紀要の発行

Research Bulletin of English Teaching, Vol. 12

発行日：2015年3月15日（予定）

(2) 2014年度支部ニューズレターの発行

『JACET北海道支部ニューズレター』28号

発行日：2015年3月31日（インターネット上で公開予定）

（目時光紀・天使大学）

訃報

本学会会員 北尾謙治先生（同志社大学・関西支部）が2014年8月21日逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

『JACET 通信』192号をお届けいたします。本号では、文教大学の千葉克裕先生に特別寄稿をいただきました。教育は人格的接触を通じて人の潜在的資質を引き出す創造的作用であることが改めてよく分かります。心から感謝いたします。また、第53回国際大会及び特別委員会のご報告に対しても御礼を申し上げます。

1969年4月創刊の本通信は200号も視野に入ってきました。過去の記事や企画に学びながら、新しいアイデアも取り入れて一層の誌面充実に努めて参りたいと存じます。会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。（水島）

編集：『JACET 通信』委員会

理事 尾関直子・明治大学

委員長 水島孝司・南九州短期大学

副委員長 遠藤雪枝・清泉女子大学

Hamilton, Robert・明治大学

伊藤健一・北九州市立大学

Lieb, Maggie・明治大学

目時光紀・天使大学

仁科恭徳・明治学院大学

岡崎久美子・仙台高等専門学校

大須賀直子・明治大学

下内 充・東海学院大学

田口悦男・大東文化大学

鳥越秀知・香川高等専門学校

2014年12月1日発行

発行者 一般社団法人 大学英語教育学会 (JACET)

代表者 神保 尚武

発行所 〒162-0831 東京都新宿区横寺町55

電話 (03) 3268-9686

FAX (03) 3268-9695

<http://www.jacet.org/>

印刷所 〒252-0021 座間市緑ヶ丘3-46-12

有限会社 タナカ企画

電話 (046) 251-5775